

# 一般国道42号熊野道路建設事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告

2023（令和5）年2月

三重県埋蔵文化財センター







## 例　言

1 本書は、三重県熊野市木本町・井戸町・有馬町・久生屋町に所在する、山口遺跡（第1次）・釘抜遺跡（第1次）・岡地遺跡（第1次）・立尾遺跡（第1次）・ハサマ遺跡（第2・3次）・平遺跡（第1次）・後呂地遺跡（第1・2次）・堀ノ本遺跡（第1次）・目白遺跡（第1次）・向イ地遺跡（第1次）・久生屋奥地遺跡（第1次）の発掘調査報告書である。

2 本書にかかる発掘調査の調査原因は、一般国道42号熊野道路建設事業である。

3 調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局が負担した。

4 調査は下記の体制で実施した。

委託者　　国土交通省中部地方整備局

受託者　　三重県

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

※年度ごとの現地調査体制については第Ⅰ章を参照。

5 本書は第IV章第2節を鏑木厚太が執筆し、それ以外を石井智大・小山憲一が執筆した。編集は石井が行った。

6 発掘調査及び本報告書の作成に際しては、下記の機関と方々に、ご指導とご協力を賜った（敬称略）。

木本町自治会、井戸町自治会、有馬町自治会、久生屋町自治会、熊野市教育委員会、熊野市歴史民俗資料館、服部竜大、服部洋

7 本書で報告を行った各遺跡の発掘調査に関わる記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。ご活用願いたい。

## 凡　例

1 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「木本」、2006三重県共有デジタル地図（平成19年測図）などの地図類を用いている。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している（承認番号：令和4年4月6日付　三総合地第1号）。

2 本書で用いた座標は、すべて世界測地系による座標第VI系に基づいている。

3 本書で示す方位は、すべて座標北を用いている。

4 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）『新版　標準土色帖』（1967年初版）日本色研事業株式会社に拠る。

5 本書では、以下のように遺構の略記号表記を使用している。

S F : 瓦窯　　Pit : 柱穴・小穴

6 遺物実測図の縮尺は基本的に1/4としたが、一部の小型の遺物については1/1や1/2としたものもある。各遺物の縮尺は、図中スケール及び図版キャプションにて明示している。

7 遺物一覧表の凡例は以下の通りである。

・挿図番号は遺物図版・写真図版中の各遺物の番号と対応する。

・実測番号は実測図作成時に各遺物の実測図に付与した整理番号である。

・色調は小山正忠・竹原秀雄（編）『新版　標準土色帖』（1967年初版）日本色研事業株式会社に拠る。

・陶磁器の残存度については、口縁部、底部等の復元径による円周を12分割したうちの残存度を記している。基本的に口縁部か底部を対象としたが、両方とも遺存しない場合は、それ以外の部位の残存度を記した。口縁部と底部が遺存するものについては、基本的に口縁部を対象とした。「小片」としたものは、細片のため残存度が示せなかつたものである。

・陶磁器以外の残存度については、全体のどのくらいが遺存しているかを、目安として完形、半欠、一部欠等の表現で示した。

8 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応している。なお、遺構・遺物写真の縮尺は不同である。

# 目 次

第Ⅰ章 前言 .....	1
第1節 原因事業の概要 .....	1
第2節 調査に至る経緯 .....	1
第3節 調査の体制と経過 .....	3
第4節 文化財保護法にかかる諸通知 .....	5
第5節 調査の方法 .....	5
第Ⅱ章 位置と環境 .....	6
第1節 地理的環境 .....	6
第2節 歴史的環境 .....	7
第Ⅲ章 各遺跡の調査 .....	10
第1節 山口遺跡（第1次） .....	10
第2節 釘抜遺跡（第1次） .....	12
第3節 岡地遺跡（第1次） .....	15
第4節 立尾遺跡（第1次） .....	17
第5節 ハサマ遺跡（第2・3次） .....	19
第6節 平遺跡（第1次） .....	23
第7節 後呂地遺跡（第1・2次） .....	26
第8節 堀ノ本遺跡（第1次） .....	38
第9節 目白遺跡（第1次） .....	41
第10節 向イ地遺跡（第1次） .....	43
第11節 久生屋奥地遺跡（第1次） .....	44
第Ⅳ章 まとめ .....	48
第1節 熊野市の海浜部における埋蔵文化財の様相 .....	48
第2節 後呂地遺跡の達磨窯と瓦生産 .....	50
第3節 結語 .....	57

## 図版目次

<b>第Ⅰ章 前言</b>	
第1図 一般国道42号熊野道路計画路線及び調査対象遺跡	1
<b>第Ⅱ章 位置と環境</b>	
第2図 事業地の位置	6
第3図 調査対象遺跡及び周辺遺跡位置図	8
<b>第Ⅲ章 各遺跡の調査</b>	
第4図 山口遺跡調査区配置図	10
第5図 山口遺跡土層断面図	11
第6図 釘抜遺跡調査区配置図	12
第7図 釘抜遺跡調査区平面図	13
第8図 釘抜遺跡土層断面図	14
第9図 釘抜遺跡出土遺物	14
第10図 岡地遺跡調査区配置図	15
第11図 岡地遺跡土層断面図	16
第12図 岡地遺跡出土遺物	16
第13図 立尾遺跡調査区配置図	17
第14図 立尾遺跡土層断面図	18
第15図 ハサマ遺跡調査区配置図	19
第16図 ハサマ遺跡土層断面図	20
第17図 ハサマ遺跡出土遺物	22
第18図 平遺跡調査区配置図	23
第19図 平遺跡調査区平面図	24
第20図 平遺跡土層断面図	25
第21図 後呂地遺跡調査区配置図	26
第22図 後呂地遺跡土層断面図	28
第23図 達磨窯模式図	29
第24図 後呂地遺跡S F 1	30
第25図 後呂地遺跡S F 2	31
第26図 後呂地遺跡出土遺物①	33
第27図 後呂地遺跡出土遺物②	34
第28図 後呂地遺跡出土遺物③	35
第29図 後呂地遺跡出土遺物④	36
第30図 堀ノ本遺跡調査区配置図	38
第31図 堀ノ本遺跡調査区平面図	39
第32図 堀ノ本遺跡土層断面図	40
第33図 目白遺跡調査区配置図	41
第34図 目白遺跡土層断面図	41
第35図 向イ地遺跡調査区配置図	43
第36図 向イ地遺跡土層断面図	43
第37図 久生屋奥地遺跡調査区配置図	44
第38図 久生屋奥地遺跡土層断面図	44
<b>第Ⅳ章 まとめ</b>	
第39図 地形区分と遺跡の立地	49
第40図 窯道具の地域的様相	55
第41図 瓦窯の変遷	55

## 表目次

<b>第Ⅰ章 前言</b>	
第1表 一般国道42号熊野道路間連遺跡一覧表	
	2
<b>第Ⅲ章 各遺跡の調査</b>	
第2表 ハサマ遺跡調査区名対照表	20
第3表 後呂地遺跡調査区名対照表	27
第4表 出土遺物一覧表	46
<b>第Ⅳ章 まとめ</b>	
第5表 達磨窯調査事例一覧表	52

## 写真図版目次

写真図版 1	.....60	後呂地遺跡 S F 2 完掘状況（西から）	.....
山口遺跡調査区 6 全景（南から）		後呂地遺跡 S F 2 完掘状況（東から）	.....
山口遺跡調査区 8 全景（東から）		写真図版 9	.....68
釘抜遺跡調査区 1 全景（北から）		後呂地遺跡 S F 2 西半部土層断面（南から）	.....
釘抜遺跡調査区 2 全景（西から）		後呂地遺跡 S F 2 東半部土層断面（北から）	.....
釘抜遺跡調査区 1 ピット（南から）		写真図版10	.....69
釘抜遺跡調査区 2 ピット（東から）		後呂地遺跡 S F 2 完掘状況（南から）	.....
釘抜遺跡調査区 2 土層（南から）		後呂地遺跡 S F 2 完掘状況（北から）	.....
釘抜遺跡出土遺物		後呂地遺跡 S F 2 烧成室西側アップ（北から）	.....
写真図版 2	.....61	後呂地遺跡 S F 2 畦構築状況（北から）	.....
岡地遺跡調査区 3 全景（西から）		後呂地遺跡 S F 2 西側燃焼室壁体構築状況	.....
岡地遺跡出土遺物		（北から）	.....
立尾遺跡調査区 2 全景（南から）		写真図版11	.....70
立尾遺跡調査区 3 全景（南から）		後呂地遺跡出土遺物	.....
ハサマ遺跡調査区 3～5（北から）		写真図版12	.....71
ハサマ遺跡調査区10全景（南から）		後呂地遺跡出土遺物	.....
ハサマ遺跡調査区14全景（北から）		写真図版13	.....72
ハサマ遺跡調査区15土層（南から）		後呂地遺跡出土遺物	.....
写真図版 3	.....62	写真図版14	.....73
ハサマ遺跡出土遺物		後呂地遺跡出土遺物	.....
写真図版 4	.....63	写真図版15	.....74
ハサマ遺跡出土遺物		後呂地遺跡出土遺物	.....
平遺跡調査区 9 全景（東から）		写真図版16	.....75
平遺跡調査区 6 土層（西から）		後呂地遺跡出土遺物	.....
写真図版 5	.....64	写真図版17	.....76
後呂地遺跡 S F 1 完掘状況（北から）		堀ノ本遺跡調査区 5 全景（西から）	.....
後呂地遺跡 S F 1 完掘状況（南から）		堀ノ本遺跡調査区 1 土層（西から）	.....
写真図版 6	.....65	目白遺跡調査区 3 全景（南から）	.....
後呂地遺跡 S F 1 南半部（東から）		目白遺跡調査区 2 土層（東から）	.....
後呂地遺跡 S F 1 烧成室北側（北から）		向イ地遺跡調査区 1 全景（北から）	.....
写真図版 7	.....66	向イ地遺跡調査区 2 土層（西から）	.....
後呂地遺跡 S F 1 窯口周辺（西から）		久生屋奥地遺跡調査区 2 全景（南から）	.....
後呂地遺跡 S F 2 検出状況（西から）		久生屋奥地遺跡調査区 2 土層（西から）	.....
写真図版 8	.....67		

# 第Ⅰ章 前 言

## 第1節 原因事業の概要

一般国道42号熊野道路（以下、熊野道路）は、一般国道42号熊野尾鷲道路の熊野大泊ICから熊野市久生屋町に至る延長6.7kmの自動車専用道路で、平成26年度に事業が新規に開始された（第1図）。

熊野道路の建設が計画された東紀州地域南部には、海沿いに唯一の幹線道路である国道42号が南北に縱走しているが、大規模な南海トラフ地震の発生時に約7割を超える区間が津波により浸水すると想定されており、当該地域が孤立することが危惧されている。

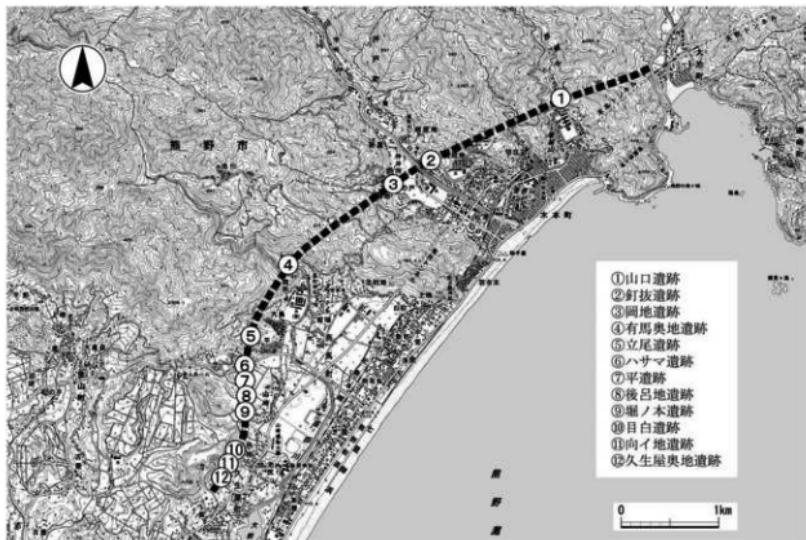
そのため、津波浸水時にも機能する新たな道路の整備によって、地域が孤立することを回避とともに、紀勢自動車道、熊野尾鷲道路と一体となって広域的な防災に資する道路ネットワークを構築することを目的として、熊野道路の建設が計画されたのである。

熊野道路には、このほかにも重篤患者の搬送時間の短縮など日常的な救急医療活動における利便性の向上や、安定的な経路の確保による東紀州地域の観光地へのアクセス向上等の効果も期待されている。

## 第2節 調査に至る経緯

平成26年度 熊野道路の事業着手に伴い、平成27年2月に国土交通省中部地方整備局紀勢国道事務所（以下、紀勢国道事務所）から三重県教育委員会を

通じて、三重県埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）に対して埋蔵文化財の有無確認の依頼がなされた。



第1図 一般国道42号熊野道路計画路線及び調査対象遺跡（1/50,000）

第1表 一般国道42号熊野道路関連遺跡一覧表

番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	事業地内 遺跡面積 (m <sup>2</sup> )	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査年度	備考
1	a129	山口遺跡	熊野市木本町新田	3,000	180	平成31(令和元)年度	
2	a130	釣桟道跡	熊野市井戸町相屋地	1,200	188	平成31(令和元)年度	
3	a131	岡池遺跡	熊野市井戸町岡池地	4,300	262	令和2年度	
4	a132	有馬奥池遺跡	熊野市有馬町奥池地	100	—	—	現地保存
5	a133	立尾遺跡	熊野市有馬町大島	3,900	170	平成31(令和元)年度	
6	a116	ハサマ遺跡	熊野市有馬町山崎	9,600	370	平成30年度・ 平成31(令和元)年度	
7	a134	平遺跡	熊野市有馬町大島	7,400	386	平成31(令和元)年度	
8	a135	後呂地遺跡	熊野市有馬町山崎	18,800	1,330	平成30年度・ 平成31(令和元)年度	
9	a136	堀ノ本遺跡	熊野市有馬町山崎	8,600	200	平成31(令和元)年度	
10	a137	日白遺跡	熊野市久生屋町日白	2,000	160	令和3年度	
11	a138	向イ池遺跡	熊野市久生屋町向イ池	1,800	52	令和3年度	
12	a139	久生屋奥地遺跡	熊野市久生屋町奥地	1,200	120	令和3年度	
(計) 61,900				(計) 3,418			

これを受け、平成27年度には埋蔵文化財センターから地元の熊野市教育委員会に事業対象地域における埋蔵文化財の有無について照会を行うとともに、平成27年3月2日・3日の両日に埋蔵文化財センター職員による現地踏査を行った。

それらの結果を踏まえて、熊野道路建設事業に際しては計12遺跡について埋蔵文化財保護にかかる事前協議が必要として、埋蔵文化財センターから三重県教育委員会を通じて紀勢国道事務所への回答を行った（第1図・第1表）。

これらの遺跡は、土器・陶磁器などの散布がみられたり、周辺に既知の文化財などが所在し関連する遺物・遺構の存在が推定されたものである。また、事業対象となった地域には古代から中世にかけての莊園（有馬荘）の存在が推定されていることから、砂堆などの微高地上や段丘上には、それに関連する集落跡などが存在する可能性が考えられた。

**平成27年度** 対象となった12遺跡のうち、ハサマ遺跡を除く11遺跡については新規に発見されたものであったため、熊野市教育委員会より遺跡の発見通知が三重県教育委員会になされ、埋蔵文化財包蔵地として把握されるに至った。

平成27年11月には、事業主体である紀勢国道事務所と三重県教育委員会社会教育・文化財保護課、埋蔵文化財センターの3者で、熊野道路の事業計画及び今後のスケジュールの確認を目的とした協議を行った。

この中で、事業内容に計画変更等があることが判

明したため、紀勢国道事務所より改めて当該範囲の埋蔵文化財の有無の確認に関する依頼があり、これを受けて埋蔵文化財センターは熊野市教育委員会に照会するとともに、平成28年1月21日に現地確認を行った。

その結果、後呂地遺跡の埋蔵文化財包蔵地としての範囲に若干の修正が生じたものの、新規に協議対象となる遺跡は確認されなかった。

**平成28年度** 平成29年2月に、紀勢国道事務所との間で事業の進捗状況及び発掘調査箇所の優先順位の確認と、発掘調査に要する経費に関する協議を行った。

**平成29年度** 平成29年8月に、紀勢国道事務所と埋蔵文化財センターの両者で、発掘調査の計画及び発掘調査に要する経費、発掘調査や整理作業にあたるために職員が常駐するための整理所の開設等について協議を行った。

同年9月には、紀勢国道事務所と三重県県土整備部道路企画課、三重県教育委員会社会教育・文化財保護課、埋蔵文化財センターの4者で、平成29年度の事業の動向、発掘調査対象地にかかる用地買収状況、平成30年度に向けたスケジュール、整理所の開設等について協議を行った。また、平成30年2月にも同様の協議を行った。

以上のような協議を経て、現状保存が困難な11遺跡について事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることが決定された。

### 第3節 調査の体制と経過

#### (1) 調査の体制

熊野道路建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査及び整理作業は、以下の体制で行った。

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター

【平成30年度】

三重県埋蔵文化財センター 調査研究2課

副参事兼課長：上村安生

主幹兼課長代理：長谷川哲也

技師：鐸木厚太

【令和元年度】

三重県埋蔵文化財センター 調査研究2課

副参事兼課長：竹田憲治

主幹兼課長代理：新名強

主幹：小山憲一

【令和2年度】

三重県埋蔵文化財センター 調査研究2課

課長：新名強

主事：若井啓英

【令和3年度】

三重県埋蔵文化財センター 調査研究2課

課長：新名強

主事：若井啓英

【令和4年度】

三重県埋蔵文化財センター 調査研究2課

課長：角正芳浩

課長代理：石井智大

#### (2) 調査の経過

熊野道路の路線上にある遺跡は、最も北に位置する山口遺跡から、最も南に位置する久生屋奥地遺跡まで、計12遺跡である（第1図・第1表）。

ただし、有馬奥地遺跡については、その後の詳細設計の段階で、道路が高架となり埋蔵文化財に影響を及ぼさないことが判明したため、調査対象から除外した。

調査を実施した各遺跡の調査期間と面積は、以下の通りである（報告順）。

##### 【山口遺跡（第1次）】

調査期間：令和元年7月3日～令和元年7月25日

調査面積：180m<sup>2</sup>

##### 【釤抜遺跡（第1次）】

調査期間：令和元年7月26日～令和元年7月31日

調査面積：188m<sup>2</sup>

##### 【岡地遺跡（第1次）】

調査期間：令和2年8月20日～令和2年10月21日

調査面積：262m<sup>2</sup>

##### 【立尾遺跡（第1次）】

調査期間：令和元年7月31日～令和元年8月7日

調査面積：170m<sup>2</sup>

##### 【ハサマ遺跡（第2・3次）】

第2次

調査期間：平成30年7月9日～平成30年7月10日

調査面積：170m<sup>2</sup>

第3次

調査期間：令和元年8月8日～令和元年8月19日

調査面積：200m<sup>2</sup>

##### 【平遠跡（第1次）】

調査期間：令和元年8月22日～令和元年9月3日

調査面積：386m<sup>2</sup>

##### 【後呂地遺跡（第1・2次）】

第1次

調査期間：平成30年10月15日～平成30年10月24日

調査面積：800m<sup>2</sup>

第2次

調査期間：令和元年9月3日～令和元年9月20日

調査面積：530m<sup>2</sup>

##### 【堀ノ本遺跡（第1次）】

調査期間：令和元年8月20日～令和元年8月22日

調査面積：200m<sup>2</sup>

##### 【目白遺跡（第1次）】

調査期間：令和3年5月25日～令和3年7月27日

調査面積：160m<sup>2</sup>

##### 【向地遺跡（第1次）】

調査期間：令和3年5月25日～令和3年7月27日

調査面積：52m<sup>2</sup>

##### 【久生屋奥地遺跡（第1次）】

調査期間：令和3年5月25日～令和3年7月27日

調査面積：120m<sup>2</sup>

### (3) 調査日誌（抄）

#### 【山口遺跡】令和元年

7月23日 調査区1～3掘削。盛土が厚く地山を確認できず。

7月24日 調査区4～7掘削。

7月25日 調査区8掘削。

#### 【釘抜遺跡】令和元年

7月29日 調査区3～5掘削。

7月30日 調査区2掘削。ピット1基検出。

7月31日 調査区1掘削。ピット2基検出。

#### 【岡地遺跡】令和2年

9月8日 調査区4掘削。陶器、磁器出土。

9月9日 調査区5・6掘削。

9月10日 調査区2・3掘削。陶器、磁器出土。

9月11日 調査区1掘削。陶器出土。

9月15日 埋戻し作業中に畦畔破損。

10月7日 畦畔復旧。埋戻し完了。

#### 【立尾遺跡】令和元年

7月31日 調査区1掘削。

8月2日 調査区2～4掘削。

8月7日 調査区5・6掘削。

#### 【ハサマ遺跡（第2次）】平成30年

7月9日 調査区1～3掘削。

7月10日 調査区4～7掘削。

#### 【ハサマ遺跡（第3次）】令和元年

8月8日 調査区8・9・11掘削。

8月9日 調査区10・12・13掘削。

8月19日 調査区14・15掘削。

#### 【平遺跡】令和元年

8月22日 調査区10掘削。

8月27日 調査区1・9・11掘削。

8月29日 調査区6・7・8掘削。

9月2日 調査区2～5掘削。

#### 【後呂地遺跡（第1次）】平成30年

10月15日 調査区5・6掘削。調査区6で達磨窯を検出。

10月16日 調査区7～11・13掘削。

10月17日 調査区2～4・12掘削。達磨窯の検出状況実測。

況実測。

10月18日 調査区14～16掘削。

10月19日 調査区17～19掘削。

10月20日 達磨窯の掘削。瓦取り上げ。

10月22日 達磨窯掘削及び実測。調査区1掘削。

10月23日 達磨窯実測終了

10月24日 達磨窯焼成部の断ち割り。全調査終了。

#### 【後呂地遺跡（第2次）】令和元年

9月3日 調査区21・22掘削。

9月6日 調査区23・25・29・30掘削。調査区23で達磨窯検出。

9月9日 調査区20・26掘削。調査区26で錢貨1点出土。

9月10日 調査区31・32掘削。達磨窯検出状況写真撮影。調査区土層断面図作成。

9月11日 達磨窯の検出状況実測。遺構掘削。

9月12日 達磨窯遺構掘削。

9月17日 達磨窯写真撮影。遺構実測。

9月19日 達磨窯実測図作成終了。埋土土層断面図作成。遺構掘削（完掘）。

9月20日 達磨窯完掘状況写真撮影。達磨窯解体、構築材として用いられていた瓦を取り上げ。断ち割り後、断面図作成。

#### 【堀ノ本遺跡】令和元年

8月20日 調査区1・6・7掘削。

8月21日 調査区2～4掘削。ピット4基検出。

8月22日 調査区5掘削。

#### 【目白遺跡】令和3年

6月15日 調査区1掘削。

6月17日 調査区3・4掘削。

6月18日 調査区2掘削。

#### 【向イ地遺跡】令和3年

6月21日 調査区1・2掘削。

6月22日 調査区3掘削。

#### 【久生屋奥地遺跡】令和3年

6月22日 調査区1掘削。

6月23日 調査区2掘削。調査区1・2ともに埋め戻し。

6月24日 調査区3掘削。

6月25日 埋め戻し完了。

## 第4節 文化財保護法にかかる諸通知

当該事業にあたっての文化財保護法等に係る諸手続は、以下の通り行われている。

なお、ハサマ遺跡を除く10遺跡に有馬奥地遺跡を加えた計11遺跡については、事前の分布調査によって発見されたため、新たに周知の埋蔵文化財包蔵地とするための手続がなされている。

### ○埋蔵文化財包蔵地の発見にかかる通知

・平成27年3月31日付け、熊教第2869号（県教育長あて熊野市教育委員会教育長通知）

○土木工事等のための発掘に関する通知（文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項）

・平成30年6月6日付け、国部整紀計第16号（県教育長あて国土交通省中部地方整備局紀勢国道事務所長通知）

○発掘調査の着手報告（文化財保護法第99条第1項）

・令和元年7月5日付け、教埋第115号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・令和2年9月7日付け、教埋第144号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・令和3年6月22日付け、教埋第97号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

○文化財の発見・認定通知（文化財保護法第100条第2項）

### 【後呂地遺跡】

・令和元年12月26日付け、教委第12-4416号（熊野警察署長あて県教育長通知）

### 【ハサマ遺跡】

・令和元年12月26日付け、教委第12-4417号（熊野警察署長あて県教育長通知）

### 【岡地遺跡】

・令和2年11月12日付け、教委第12-4417号（熊野警察署長あて県教育長通知）

## 第5節 調査の方法

### （1）現地調査

**調査区設定** 各遺跡とも、遺物・遺構が検出される想定される箇所を中心として、幅2m程度の細長い調査区を設定し調査を行った。ただし、堀ノ本遺跡の調査区の一部は、調査対象地における制約から幅1mとしている。

遺構が調査区外に及ぶ場合には、適宜調査区を拡張して対応した。

**掘削と検出** 調査区内の表土の除去は、基本的に重機（バックホウ）を用いて行った。重機掘削後に、人力によりジョレンまたはステーキホー等を用いて遺構検出面を精査し、遺構検出を行った。

遺構の掘削は、すべて手作業で行った。

**図面の作成** 調査区の平面図は縮尺1/20で作成した。調査区の土層断面図は、各調査区とも代表的な箇所を選んで作成している。

後呂地遺跡で検出した瓦窯については、縮尺1/10

で平面・立面の実測図を作成したが、土層断面図のみ縮尺1/20で作成した。

**写真撮影** 調査時の遺構等の写真の撮影には、基本的に一眼レフのデジタルカメラ（Nikon D3300）を使用した。

### （2）整理作業

**整理作業** 出土遺物は、洗浄、接合、注記を行った後に、出土した調査区・遺構ごとに整理した。そして、実測可能な遺物を選別した。

選別した遺物については個別に実測を行い、場合に応じて拓本を採取した。実測遺物には、実測図との照合ができるよう、遺物と実測図の両方に、冒頭に「R」を付した実測番号（「R〇〇〇-〇〇」）を与えた。

**写真撮影** 主要な遺物については、報告書掲載用に写真の撮影を行った。撮影には、中判相当のデジタルカメラ（Nikon D800）を使用した。

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

**地形等** 一般国道42号熊野道路建設事業に伴って発掘調査を行った遺跡は、すべて熊野市に所存する(第2図)。

熊野市は、三重県南部の東紀州と呼ばれる地域に位置する<sup>1)</sup>。市域の大部分は山地で、標高1028.2mの保色山をはじめ、長尾山、高代山など標高700~900mの急峻な山々が連なる。山地と海岸との間の平野は狭い。これらの山々に端を発する河川の多くは、熊野川の支流で和歌山県との県境を流れる北山川へと注いでいるが、井戸川や産田川、志原川などは熊野灘へと注ぎ込んでいる。

東側は熊野灘に面しており、海岸線は市の北部ではリアス式海岸となって入り組んだ様相を呈している。一方、南部では三重県南牟婁郡紀宝町の熊野川河口まで長く続く直線的な海岸線が形成されており、七里御浜と呼ばれている。七里御浜は礫を主体とする礫浜で、円磨度の高い円礫が多く、古くからそうした円礫が採取され、石細工や庭園の砂利敷きなどに利用されてきた。

七里御浜沿いには長い浜堤が形成され、その浜堤の内陸側には後背低地が広がっている。こうした地形環境は、井戸川河口付近や産田川沿いで顕著に認められる。産田川沿いの後背低地には山崎沼と呼ばれる湿地が広がり、一部が埋め立て・造成によって運動公園などになっているが、全般的に土地の利用は低調である。

現在の集落は、海岸沿いの浜堤上や河川沿いの谷底平野・氾濫平野、また低平な段丘上などを中心に形成されている。七里御浜沿いの浜堤上には国道42号線が縱走しており、この幹線道路沿いを中心とした町並みが形成されている。

また、井戸川の河口付近には、市役所やJR熊野市駅といった生活の中心的な施設が集中し、市街地化している。

**産業** 主要な産業としては、山間部ではヒノキなどを中心とした林業、沿海部では漁業が挙げられる。農業も盛んに行われているが、特に山間部では、温暖な気候と日照条件のよい山地斜面という立地を活かした柑橘類の栽培が盛んである。

このほか、西側の山間部にあり2005年に熊野市と合併した旧紀和町内では、古くから銅や鉛が多く産出し、1970年代まで鉱業が活発であった。

また、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産として登録されている熊野参詣道や鬼ヶ城・獅子岩、花の窟、あるいは丸山千枚田など、史跡や名勝、景勝地が多く存在しており、それらは観光資源として積極的に活用されている。

#### 註

1) 本節の記述には、全体的に以下の文献を参照した。

伊藤良1983『南牟婁郡』『三重県の地名』日本歴史地名大系第24巻 平凡社、熊野市1983『熊野市史』上巻



第2図 事業地の位置 (1/2,000,000)

## 第2節 歴史的環境

熊野市を含む東紀州地域では、これまで大規模な開発事業が少なかったこともあり、発掘調査が行われた遺跡は僅少である。そのため、遺跡の分布や内容といった点について、不明瞭な部分が多い。

**旧石器・縄文時代 東紀州地域**では、これまでに確実な旧石器時代の遺跡は確認されていない。この地域で人間の営為の痕跡が認められるようになるのは、縄文時代早期以降である。縄文時代早期の土器は、尾鷲市向井遺跡、曾根遺跡、熊野市釜の平遺跡などで確認されている。

縄文時代中期以降には、当該地域でも遺跡数が増加する。熊野市では七里御浜沿いの浜堤上に位置する松原遺跡（9）や口有馬遺跡（18）、有馬池A遺跡（19）、有馬池B遺跡（22）、仲の茶屋遺跡（23）、大前池A遺跡（24）、大前池B遺跡（25）、釜の平遺跡などで縄文土器が出土している<sup>1)</sup>。

中でも、大前池の南側に位置する釜の平遺跡は、終戦直前の開墾によって遺物が地表面に露出したことによって存在が知られ、多数の遺物が採集されている。出土した土器には早期や前期のものもみられるが、主体は中期から後期にかけてのものである。土器型式としては西日本の船元式を中心に、関東地方の五領ヶ台式や北陸地方の新崎式に類似するもののがみられ、東西交流の様相が窺われる<sup>2)</sup>。

**弥生時代 東紀州地域**では弥生時代の遺跡は少ないが、熊野市津ノ森遺跡（12）では弥生時代の遺物が発掘調査によって出土している。

津ノ森遺跡は、産田川沿いの後背低地に北側から延びる比較的広い段丘上を中心として立地する。5次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代ないし古墳時代の堅穴建物の可能性がある遺構の一剖も検出されている。出土した土器には中期中葉から後期後葉にかけてのものが目立つ。また、石鐵や石包丁などの石器のほか、砂岩製の銅鐸形石製品とも考えられる用途不明の石製品も出土している<sup>3)</sup>。

**古墳時代 東紀州地域**では、紀北町で横城古墳、おまわき古墳の存在が知られているが、尾鷲市以南では今のところ確実な古墳は確認されていない。

ただ、津ノ森遺跡（12）や御浜町東里遺跡では弥

生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器が多数出土しており<sup>4)</sup>、津ノ森遺跡では滑石製の勾玉や双孔円板、須恵器坏身など、古墳時代中期から後期にかけての遺物も出土している<sup>5)</sup>。

津ノ森遺跡の南側に位置する山崎沼は、過去には大前池などともつながる潟湖となっていたと推定され、津ノ森遺跡はそれに臨む港であったとも考えられている。ただし、山崎遺跡（21）付近で行われた試掘調査からは、古墳時代後期以降に山崎沼付近は陸化していったことが指摘されている<sup>6)</sup>。

**古代以降 津ノ森遺跡**では、奈良時代から室町時代にかけての土師器や須恵器、陶器、瓦質土器などが出土している。連絡と集落が営まれていたものと考えられる。

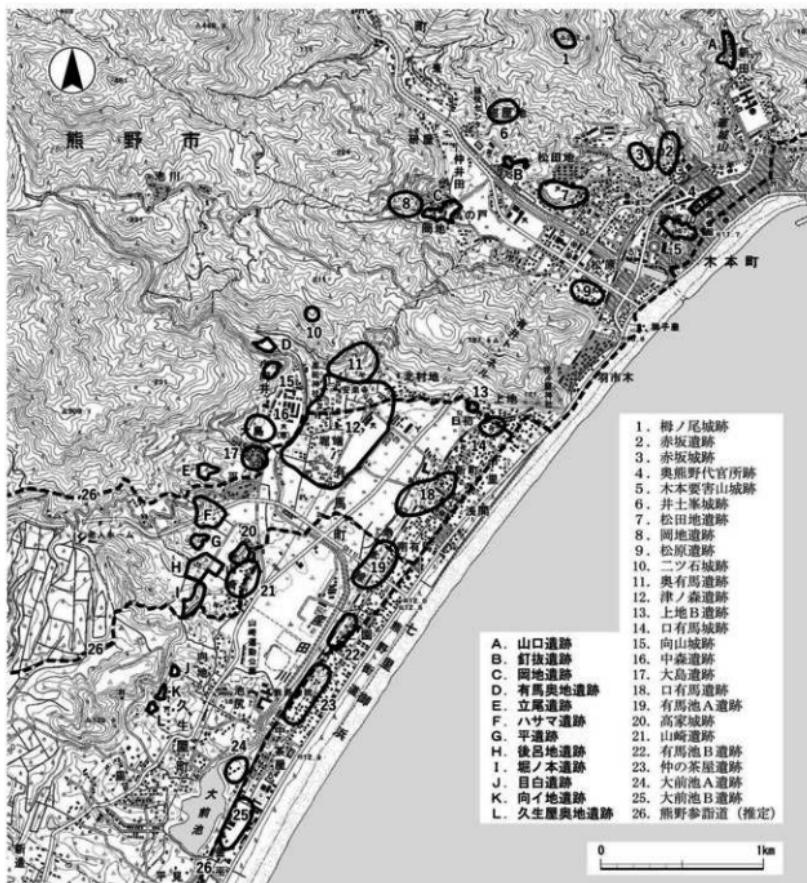
また、ハサマ遺跡（F）では国道の改良事業に伴って調査が行われ、頗著な遺構は確認されなかつたものの、近世の陶器類のほかに灰釉陶器や山茶碗の破片が採集され、平安・鎌倉時代を中心とした集落の存在が推定されている<sup>7)</sup>。

集落以外には、丘陵上には赤坂城跡（3）や木本要害山城跡（5）、向山城跡（15）など、室町時代後期（戦国期）の小規模な城館跡とみられるものが複数確認されている。

古代以降の動向としては、熊野参詣道伊勢路（26）が成立し発展していったことが、当該地域の歴史的環境として重要である。

**熊野参詣道伊勢路**は、伊勢方面から熊野三山へ参詣する経路として平安時代後期には成立したと思われる。室町時代末期の16世紀後半には尾鷲市の八鬼山道沿いには町石が設置され、江戸時代には各所の参詣道に石疊の敷設がなされたり、宿駅や一里塚も設置されるなど街道の整備が進み、多くの参詣者で賑わった。熊野市内にも松本峠道や風伝峠道などがあり、一部には石疊も残されている。

しかしながら、明治時代以降は自動車の普及に対応した新たな道路の開通等によって、熊野参詣道伊勢路の交通路としての重要性は低下し<sup>8)</sup>、特に山間部では生活や林業用の道路などとして部分的に使用されるのみとなっていた。



第3図 調査対象遺跡及び周辺遺跡位置図 (1/30,000)

また、江戸時代には、現在の熊野市木本町に奥熊野代官所（4）が設けられた。奥熊野<sup>9)</sup>と呼ばれる地域の村々を統括し、地域の政治中枢として明治2年に廃止されるまで存続していた<sup>10)</sup>。

#### 註

- 1) 熊野市教育委員会1984『津ノ森遺跡発掘調査概要IV』
- 2) 熊野市1983『熊野市史』上巻

3) 熊野市教育委員会1980『津ノ森遺跡調査概要』、熊野市教育委員会1982『津ノ森遺跡発掘調査概要II』、熊野市教育委員会1983『津ノ森遺跡発掘調査概要III』、前掲註1文献

4) 川崎志乃2001「御浜町東里遺跡出土の遺物」『研究紀要』第10号 三重県埋蔵文化財センター

5) 前掲註3文献

6) 稲積裕昌2000『紀伊半島東岸部の古代港と海上交通一

- 記紀熊野関連説話成立の前提一』『Mie history』vol.11  
三重歴史文化研究会
- 7) 三重県教育委員会1984『ハサマ遺跡発掘調査概要』
- 8) 三重県2005『世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」  
三重県保存管理計画』
- 9) 紀伊半島南部に位置した旧牟婁郡のうち、最も東側  
にあたる現在の紀北町から熊野市北部にかけての地域  
に比定される。
- 伊藤良1983「紀伊国」『三重県の地名』日本歴史地名大  
系第24巻 平凡社、笠原正夫2015『近世熊野の民衆と  
地域社会』 清文堂出版
- 10) 前掲註2文献

## 第III章 各遺跡の調査

### 第1節 山口遺跡（第1次）

#### （1）位置と調査前状況

山口遺跡は、熊野市木本町新田に所在する。近隣には、これまでに遺跡の存在はほとんど知られていないが、南東に1kmほど離れた海沿いには熊野参詣道伊勢路（松本峠道）が通っている。また、学术上重要な天然の風蝕・波蝕洞穴・岩塊として国の天然記念物及び名勝に指定されている熊野の鬼ヶ城も存在する。

遺跡は、西郷川沿いに谷状に形成された狭い低地に位置している。周辺の西郷川右岸は河岸段丘状に若干高くなっているが、造成等による地形の改変も考えられた。

調査前の現況は宅地で、建物及び基礎撤去後に調査を行った。

#### （2）調査成果

事業地内に8箇所の調査区を設定して調査を行つ

た（第4図）。

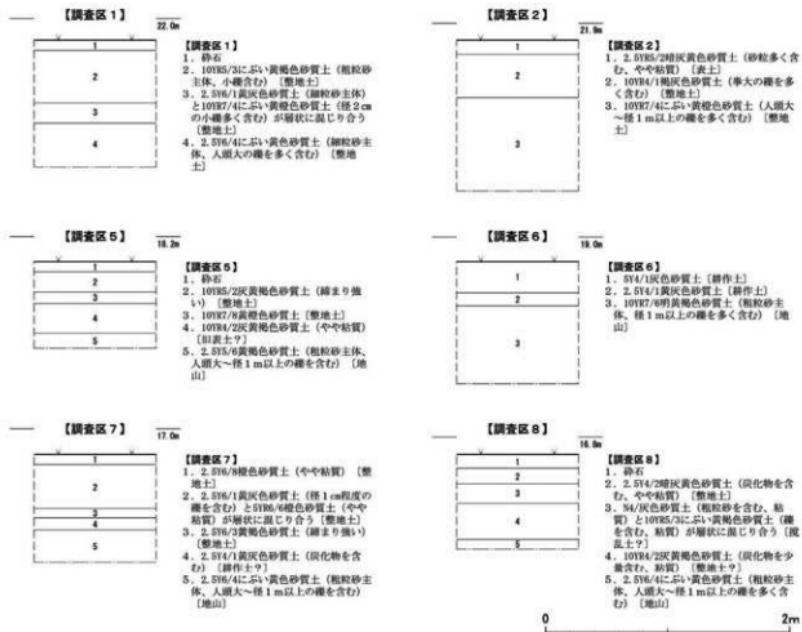
**調査区1** 幅2.5m、長さ5mの調査区である。地表下約1mまで宅地造成時の盛土となっており、掘削深度が深くなると調査区壁面が崩落する危険があつたため、途中で掘削を中止した。そのため、地山面まで掘削することができなかつた。盛土には人頭大の礫が多数混在していた。

**調査区2** 幅2m、長さ12mの調査区である。地表下約1.2mまで宅地造成時の盛土となっており、掘削深度が深くなると調査区壁面が崩落する危険があつたため、途中で掘削を中止した。そのため、地山面まで掘削することができなかつた。盛土には人頭大から径1mの巨大な礫が多数混在していた。

**調査区3** 幅2.5m、長さ14mの調査区である。地表下約1mまで宅地造成時の盛土となっており、掘削深度が深くなると調査区壁面が崩落する危険があつたため、途中で掘削を中止した。そのため、地山面まで掘削することができなかつた。



第4図 山口遺跡調査区配置図 (1/2,000)



第5図 山口遺跡土層断面図 (1/40)

**調査区 4** 幅2m、長さ9mの調査区である。地表下約1.2mまで宅地造成時の盛土となっており、掘削深度が深くなると調査区壁面が崩落する危険があつたため、途中で掘削を中止した。そのため、地山面まで掘削することができなかつた。

**調査区 5** 幅2m、長さ9mの調査区である。地表下約0.4～0.6mで地山面を確認した。地山は黄褐色を呈する砂質土層で、人頭大から径1m以上の巨大な礫を含む。

**調査区 6** 幅2m、長さ6mの調査区である。地表下約0.4mで地山面を確認した。地山は明黄褐色を呈する砂質土層で、径1m以上の巨大な礫を多く含む。

**調査区 7** 幅2.5m、長さ14mの調査区である。地

表下約0.6mで地山面を確認した。地山はにぶい黄褐色を呈する砂質土層で、人頭大から径1m以上の巨大な礫を含む。

**調査区 8** 幅2.5m、長さ21mの調査区である。地表下約0.4～0.8mで地山面を確認した。地山はにぶい黄褐色を呈する砂質土層で、人頭大から径1m以上の巨大な礫を多く含む<sup>1)</sup>。

## 註

1) ただし、この地山と考えた土層については、周辺住民からの情報を鑑みれば、西郷川の河川改修の際の盛土の可能性も残る。他の調査区で確認した地山についても、同様の可能性があろう。

## 第2節 釘抜遺跡（第1次）

### （1）位置と調査前状況

釘抜遺跡は、熊野市井戸町紺屋地に所在する。付近のやや高い尾根上には井上峯城跡が存在する。

遺跡は、井戸川左岸の山地斜面及び完新世段丘上に立地する。遺跡付近の井戸川右岸には一定程度の広さの低地が形成されており、自然堤防も一部で形成されているが、左岸については川沿いまで山地が迫っており、低地は狭小である。

調査前の現況は、段状に造成された畑地及び荒地であった。

### （2）調査成果

事業地内に5箇所の調査区を設定して調査を行った（第6図）。南面する斜面地を中心に調査区を設定したが、調査区1のみは他の調査区からやや西に離れており、南へ小さく突出する尾根上に位置している。

調査区1 幅2m、長さ10mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄褐色を呈する砂質土層である。

地山面を精査した結果、ピットを2基検出した。

いずれも平面形は隅丸方形を呈し、径0.45m、深さ0.15mほどである。2基は0.4mほど離れて並ぶが、両者の関係は不明である。埋土中から遺物は出土しなかった。

調査区2 幅2m、長さ40mの調査区である。地表下約0.3mで地山面を確認した。地山は明赤褐色や明黄褐色の砂質土層で、拳大から人頭大の礫を含む。

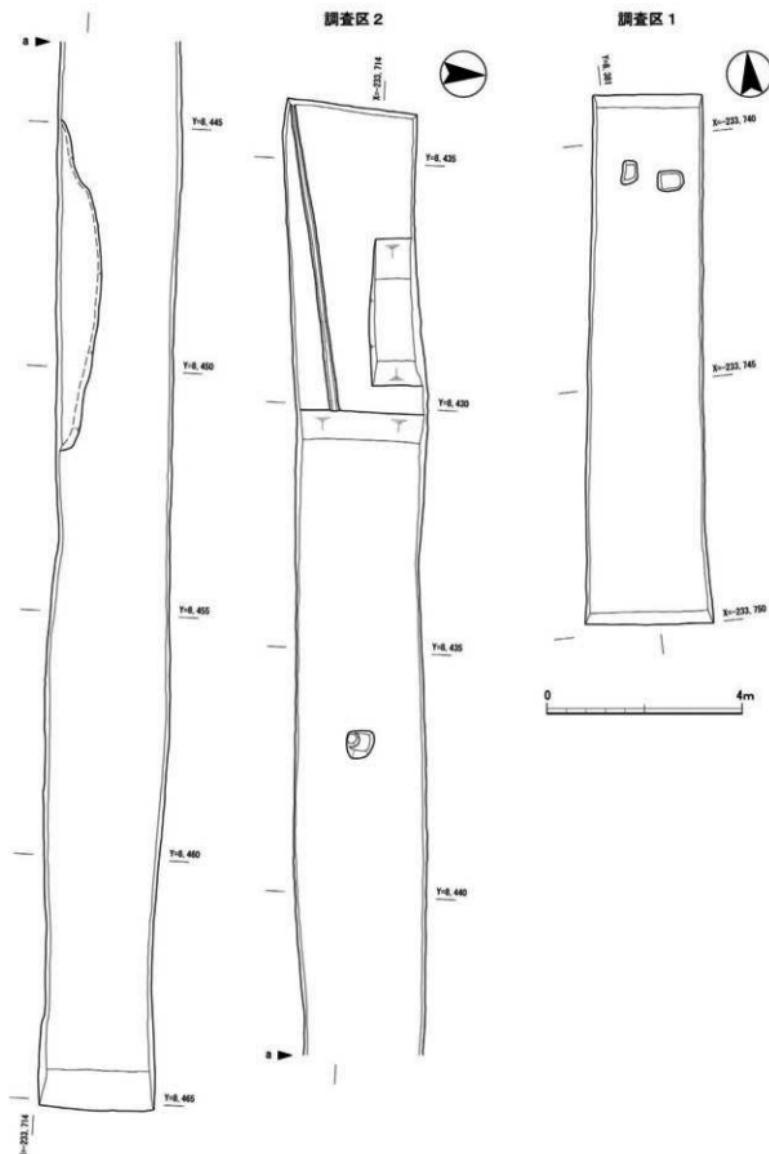
地山面を精査した結果、溝1条とピットを1基検出した。

溝は調査区の西端部で検出された。幅0.12m、深さ0.1mで、直線的に延びる。調査区西壁から東方向へ6.4mほどを検出したが、地山面より上層から掘り込まれている可能性が高いと判断されたため、それより東側については平面的な検出を行わず、確実な地山面まで鋤削を行った。埋土中から遺物は出土しなかったが、耕作土中から掘り込まれていると考えられる点や、埋土が耕作土と類似する点からみて、近代の溝であると考えられる。

ピットは調査区中央よりやや西側で検出された。平面形は隅丸方形を呈し、径0.55mほどである。底面は隅付近が一段深くなっている、最も深い箇所で0.3mほどある。埋土中には炭化物や小礫が含まれ



第6図 釘抜遺跡調査区配置図 (1/2,000)



第7図 釘抜遺跡調査区平面図 (1/100)



第8図 釘抜遺跡土層断面図 (1/40)

ていたが、遺物は出土しなかった。

**調査区3** 幅2m、長さ15mの調査区である。地表下約0.1mで地山面を確認した。地山は明赤褐色を呈する砂質土層である。

**調査区4** 幅2m、長さ18mの調査区である。地表下約0.1mで地山面を確認した。地山は明赤褐色を呈する砂質土層である。

**調査区5** 幅2m、長さ11mの調査区である。地表下約0.1mで地山面を確認した。地山は明赤褐色を呈する砂質土層である。

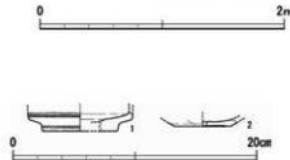
### (3) 出土遺物

**磁器 (第9図1)** 1は調査地で採集された、磁器

第9図 釘抜遺跡出土遺物 (1/4)

の筒形碗と思われるものである。底部の破片で、高台は平高台もしくは蛇目高台とみられる。外面には一部に染付による文様が残る。19世紀代のものである可能性が高い。

**施釉陶器 (第9図2)** 2は調査地で採集された、施釉陶器の小皿と思われるものである。底部の小片で、底部外面にはロクロケズリの痕跡が明瞭に残る。外面には鉄軸が施されている。



### 第3節 岡地遺跡（第1次）

#### （1）位置と調査前状況

岡地遺跡は、熊野市井戸町岡地に所在する。井戸川を挟んで釘抜遺跡の対岸に位置し、付近には大馬神社や一乗寺、三光寺などの社寺が点在する。

遺跡は、井戸川支流の小規模な河川である岡地川が、山地から井戸川右岸に形成された低地へと流れ出る谷口付近に位置している。そのため、調査地付近は小規模な扇状地状の地形を呈している。

調査前の現況は、水田及び宅地であった。

#### （2）調査成果

事業地内に6箇所の調査区を設定して調査を行った（第10図）。西に向かって標高が高くなっている、東側の調査区1・2と西側の調査区4とでは標高差が2m近くある。

**調査区1** 幅2m、長さ35mの調査区である。地表下約0.7~0.8mまで耕作土や古い時期の耕作土と思われる土層となっており、その下層で沖積層を確認した。沖積層は黄灰色のシルトを主体とする粘質土層で、土師器の細片を少量含む。この土層はかなり

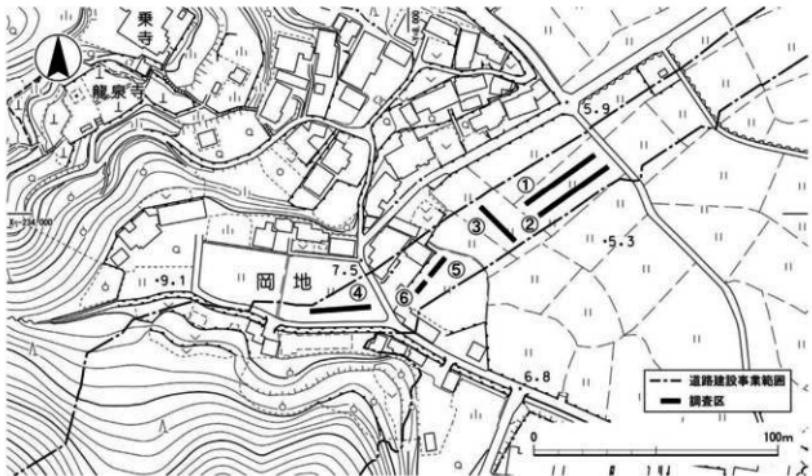
厚く堆積しており、地表下約1.3mより深くまで続いている。掘削深度が深くなると調査区壁面が崩落する危険があつたため、途中で掘削を中止した。

**調査区2** 幅2m、長さ35mの調査区である。地表下約0.7~0.8mまで耕作土や古い時期の耕作土と思われる土層となっており、その下層で沖積層を確認した。沖積層は黄灰色のシルトを主体とする粘質土層で、木片を少量含む。この土層はかなり厚く堆積しており、一部では地表下約1.7mより深くまで続いている状況が確認できた。掘削深度が深くなると調査区壁面が崩落する危険があり、また地表下1.4mほどで湧水も激しくなったため、途中で掘削を中止した。

**調査区3** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.5mで沖積層と思われる土層を確認した。沖積層は黄褐色や暗灰黄色のシルトを主体とする土層と黄褐色や灰黄色の粗粒砂を主体とする土層が重なり合って形成されている。

表土掘削中に、近世から近代にかけてのものと考えられる陶器片が出土した。

**調査区4** 幅2m、長さ25mの調査区である。地表



第10図 岡地遺跡調査区配置図 (1/2,000)



第11図 岡地遺跡土層断面図 (1/40)

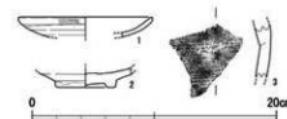
下約0.5~0.8mで沖積層を確認した。沖積層は灰オーラーブ色のシルトを主体とする土層がやや厚く堆積したもので、さらに下層には灰黄色の粗粒砂を主体とする砂疊層が地表下約1mより深くまで堆積している。

**調査区 5** 幅2m、長さ5mの調査区である。地表下約0.5mで沖積層を確認した。沖積層はにぶい黄褐色のシルトを主体とする土層や褐灰色の粗粒砂を主体とする土層などによって形成されている。地表下約0.7mほどで湧水が認められた。

**調査区 6** 幅2m、長さ3mの調査区である。地表下約0.5mで沖積層を確認した。沖積層はにぶい黄褐色や褐灰色のシルトを主体とする土層などによつて形成されている。地表下約0.7mほどで湧水が認められた。

### (3) 出土遺物

**施釉陶器 (第12図1・2)** 1・2は施釉陶器である。



第12図 岡地遺跡出土遺物 (1/4)

1は調査区4で出土した小皿である。内面及び外面上半に鉄軸が施されている。口縁部外面の一部には、ハケ状の工具のアタリと思われる痕跡が認められる。2は調査区3で出土した皿ないしは碗である。底部の破片で、内外面にオリーブ灰色の縁軸が施されている。高台は露胎となっており、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが認められる。

**無釉陶器 (第12図3)** 3は調査区4で出土した無釉陶器の甕ないし壺の体部片である。外面上には細い平行タタキが施されている。また、内面には成形時の粘土接合痕が残る。平安時代末期～鎌倉時代のものである可能性が高い。

## 第4節 立尾遺跡（第1次）

### （1）位置と調査前状況

立尾遺跡は、熊野市有馬町大島に所在する。周辺には、弥生時代～鎌倉時代の遺物を多数出土した津ノ森遺跡など複数の遺跡が存在する。

遺跡は、西側の山地から東に向かって延びる尾根の南側の、緩やかな斜面に立地している。斜面の裾部にはごく小規模な河川が流れ、南側に位置する尾根との間に浅い谷を形成している。また東側は、淀川沿いに形成された比較的広い氾濫平野や後背低地に面している。

この氾濫平野・後背低地中でも特に湿潤な山崎沼と呼ばれる一帯や、その南側の大前池などは、海岸沿いに続く浜堤の内側に形成された潟湖の痕跡とも思われ、古墳時代以前においては港が存在していた可能性もある<sup>1)</sup>。

調査前の現況は、果樹園や畑地、荒地であった。

### （2）調査成果

事業地内に6箇所の調査区を設定して調査を行った（第13図）。いざれも南向きの緩斜面に等高線に平行する形で設定したが、調査区5・6は、調査区1～4よりやや北側に位置する。

**調査区1** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.1mで地山面を確認した。地山は黄褐色を呈する粘質土層で、人頭大の礫を含む。

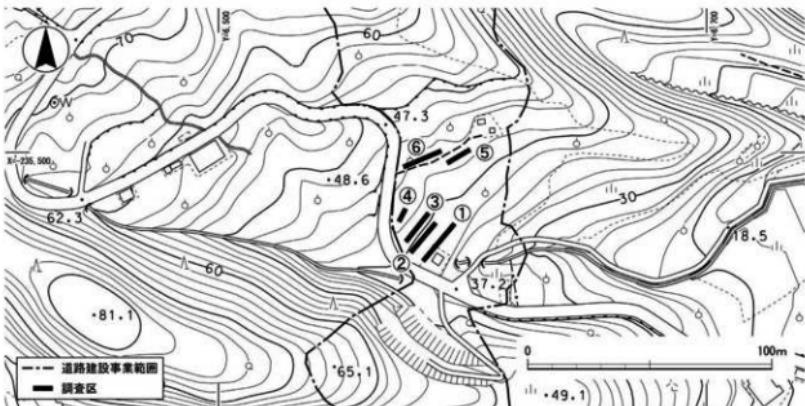
**調査区2** 幅2m、長さ16mの調査区である。地表下約0.3mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する粘質土層で、シルトを主体とし、拳大の礫を含む。

**調査区3** 幅2m、長さ15mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は明黄褐色を呈する粘質土層であるが、0.2～0.3mほどの深さで土質が変化しており、明赤褐色を呈する粘質土層となっている。

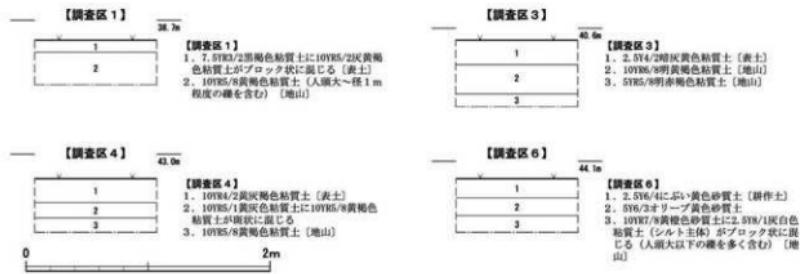
**調査区4** 幅2m、長さ6mの調査区である。地表下約0.3mで地山面を確認した。地山は黄褐色を呈する粘質土層である。

**調査区5** 幅2m、長さ11mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地表面付近には耕作土と思われる土層が認められる。地山は黄橙色砂質土で、灰白色の粘質土をブロック状に含んでいる。また、人頭大以下の礫を多量に含む。

**調査区6** 幅2m、長さ17mの調査区である。地表下約0.1～0.4mで地山面を確認した。北側に向かうにつれて耕作土などからなる地山上の堆積層が薄く



第13図 立尾遺跡調査区配置図 (1/2,000)



第14図 立尾遺跡土層断面図 (1/40)

なっている。地山は黄褐色砂質土で、灰白色の粘質土をブロック状に含んでいる。また、人頭大以下の礫を多量に含む。

#### 註

- 1) 他積裕昌2000「紀伊半島東岸部の古代港と海上交通—記紀熊野開運説話成立の前提—」『Mie history』vol. 11 三重歴史文化研究会

## 第5節 ハサマ遺跡（第2・3次）

### （1）位置と調査前状況

ハサマ遺跡は、熊野市有馬町山崎に所在する。立尾遺跡より200mほど南側に位置している。また、立尾遺跡との間に位置する尾根を、七里御浜から横垣峠へと向かう熊野参詣道伊勢路が通っていた可能性がある。

遺跡は、西側の山地から延びる舌状の尾根の先端部の緩やかな傾斜地に立地している。東側は、產田川沿いに形成された比較的広い氾濫平野及び後背低地に面している。

調査対象地は一般国道311号を挟んで南北に分かれしており、南側が第2次調査対象地、北側が第3次調査対象地となっている。第2次調査対象地の調査前の現況は山林及び荒地で、第3次調査対象地の調査前の現況は山林であった。

### （2）既往の調査

第II章第2節で触れたように、昭和58年度に一般国道311号改良事業に伴ってハサマ遺跡第1次調査

が行われている<sup>1)</sup>。

調査対象地は、第2・3次調査対象地の間の現在国道となっている部分で、10箇所の調査区を設定して調査を行っている。

その結果、調査地の東側に位置する2つの調査区で、砂岩製の磨製石斧や土師器、陶器などが出土した。このうち1つの調査区では、近世以降のものと考えられる石列も検出されている。

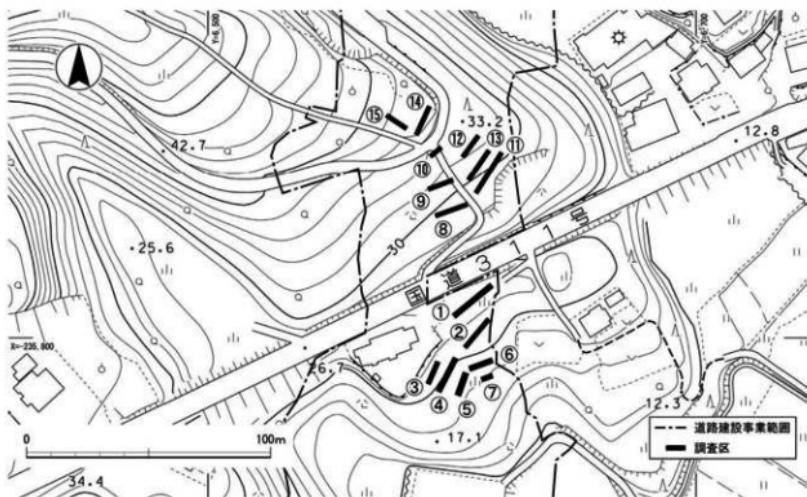
また、西側に位置する調査区付近で、山茶碗や灰釉陶器などの古代・中世の遺物が採集された。

### （3）調査成果

事業地内に第2・3次調査合わせて15箇所の調査区を設定して調査を行った（第15図）。

なお、調査区の名称は第2次調査については調査区1～7とし、第3次調査では調査区1～6・10・11<sup>2)</sup>としたが、本報告にあたって第3次調査の調査区名称を変更し、第2・3次調査を通じた通番とした（第2表）。

調査区1 幅2m、長さ20mの調査区である。西部



第15図 ハサマ遺跡調査区配置図 (1/2,000)

では地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する粘質土層である。ただし、調査区東部を中心地山上に深さ0.3~0.6mほどの近現代の掘り込みが認められ、その埋土上面に調査区西部の表土となっている褐色粘質土層が堆積している。そしてさらに、地表面に厚さ0.2mほどの盛土が施されている。

**調査区2** 幅2m、長さ15mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する粘質土層である。

**調査区3** 幅2m、長さ10mの調査区である。地表

下約0.4mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する粘質土層である。

**調査区4** 幅2m、長さ15mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する粘質土層である。調査区北部では地山上に大規模な掘り込みによる搅乱が認められた。

**調査区5** 幅2m、長さ10mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する粘質土層である。

**調査区6** 幅2m、長さ10mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する粘質土層である。調査区東壁沿いでは地山上に大規模な掘り込みによる搅乱が認められた。

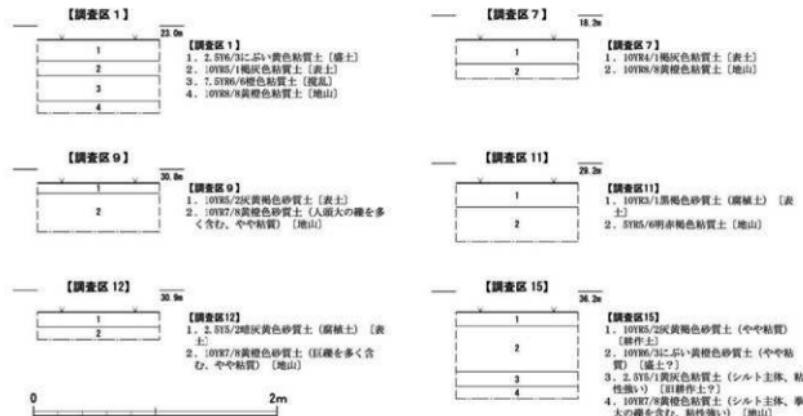
**調査区7** 幅2m、長さ5mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する粘質土層である。

**調査区8** 幅2m、長さ14mの調査区である。ただし、切り株などが多数存在したため、一部は掘削が不可能であった。地表下約0.4mで地山面を確認した。地山は明黄褐色を呈する砂質土層で、拳大から人頭大の礫を多く含む。

**調査区9** 幅2m、長さ11mの調査区である。ただし、巨大な礫が点在しており、調査区西側では調査範囲が限られた。地表下約0.1mで地山面を確認し

第2表 ハサマ遺跡調査区名対照表

調査次数	調査時	報告時
第2次	調査区1	調査区1
	調査区2	調査区2
	調査区3	調査区3
	調査区4	調査区4
	調査区5	調査区5
	調査区6	調査区6
	調査区7	調査区7
第3次	調査区1	調査区8
	調査区2	調査区9
	調査区3	調査区10
	調査区4	調査区11
	調査区5	調査区12
	調査区6	調査区13
	調査区10	調査区14
	調査区11	調査区15



第16図 ハサマ遺跡土層断面図 (1/40)

た。地山は黄橙色を呈する砂質土層で、人頭大の礫を多く含む。

**調査区10** 幅2m、長さ6mの調査区である。地表下約0.1mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する砂質土層で、巨大な礫を含む。

**調査区11** 幅2m、長さ20mの調査区である。ただし、切り株などが多数存在したため、一部は掘削が不可能であった。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は明赤褐色を呈する粘質土層である。表土は腐植土を主体としており、地山直上に堆積している。

**調査区12** 幅2m、長さ11mの調査区である。ただし、切り株や巨大な礫が多数存在したため、調査が可能な範囲はごく一部に限られた。地表下約0.1mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する砂質土層で、巨大な礫を含む。

**調査区13** 幅2m、長さ15mの調査区である。ただし、切り株や巨大な礫が多数存在したため、一部は掘削が不可能であった。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する砂質土層で、巨大な礫を多く含む。表土は腐植土を主体としており、地山直上に堆積している。

**調査区14** 幅2m、長さ13mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する粘質土層で、シルトを主体とし、拳大の礫を含む。

**調査区15** 幅2m、長さ10mの調査区である。地表下約0.6mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する粘質土層で、シルトを主体とし、拳大の礫を含む。また、表土となっている耕作土直下には、近代の盛土と推定されるにぶい黄橙色砂質土層が0.4mほどの厚さに施されている。そして、その下位にそれ以前の耕作土と思われる土層が認められる。

#### (4) 出土遺物

**磁器 (第17図1~10)** 1~10は磁器である。9を除き、調査区4からまとまって出土した。

1は小型の碗で、湯飲み碗と思われる。やや腰が張る器形を呈する。外面に斜め格子文や紅葉文が施されている<sup>3)</sup>。

2~8は丸碗である。2は器壁が厚い。外面に岩

と草花文が描かれている。3は器壁が薄く、口縁部付近がわずかに肥厚する。外面には草花文が描かれているが、その中に区画間を設け、蝙蝠文を描いている。また、口縁部内面には雷文が描かれている。器形や文様などから、19世紀前半のものと考えられる<sup>4)</sup>。4は底部付近の破片で、外面に二重線の網目文が描かれている。内面にも網目文を描き、見込みにはコンニャク印判によると思われる菊文がある。器形や文様などから、18世紀代のものである可能性が高い。5はやや小型のもので、口縁端部がわずかに外反する。外面に竹苞文が描かれており、見込みにも花弁文もしくは草花文を有する。6は口縁端部が外反し、端反碗に近い。外面に草花文と蝶文を描いている。見込みには寿字文が認められる。19世紀代のものと考えられる。7は外面に二重線の網目文を描く。8は若干腰が張る器形を呈する。外面には水面などを表現したと思われる山水文と帆掛け舟が描かれている。口縁部内面には格子文が描かれており、見込みには竹苞文とも思われるものが認められる。器形や文様などから、19世紀中頃のものである可能性が高い。

9は調査区9で出土した小皿である。口縁端部はやや外反する。内外面に青磁釉を施す。

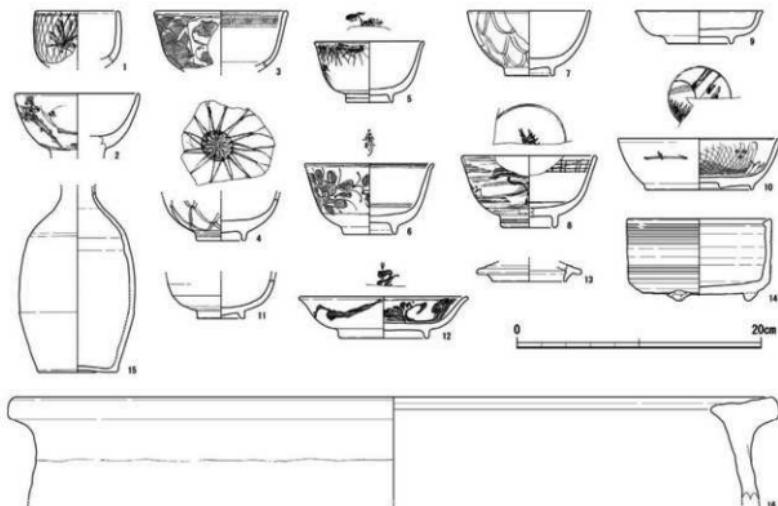
10は皿である。蛇ノ目四形高台を有する。外面には唐草文あるいは松葉文などを簡略化したような文様のみがみられるが、内面には乱れ亀甲文と草花文が描かれている。また、見込みにも圓線の中に帆掛け舟文などが描かれている。19世紀代のものと思われる。

**施釉陶器 (第17図11~15)** 11~15は施釉陶器である。

11は調査区4で出土した丸碗である。内外面に鐵釉を施す。

12は調査区4で出土した皿である。浅い皿で、口縁部は外反する。内外面に呉須によって文様が描かれる、いわゆる陶胎染付である。外面には樹木の枝のような文様が描かれており、内面には太い線で粗雑な唐草文もしくは草花文が描かれている。見込みにも記号状の文様が認められる。瀬戸・美濃産で、19世紀代のものと思われる。

13は調査区3で出土した土瓶あるいは蓋物の蓋と



第17図 ハサマ遺跡出土遺物（1/4）

思われる。天井部を欠損するが、摘みみを有するものと思われる。

14は調査区1で出土した筒形香炉もしくは蓋物の身である。内外面に灰釉を施しているが、底部外面は露胎となる。底部外面には粘土塊状の不整形な脚を3箇所に貼り付けており、一部に墨痕とみられる痕跡も認められる。

15は調査区9で出土した徳利である。口縁部以外に欠損は認められず、遺存状態は良好である。全体に器壁は薄く、外面には鉄軸が施されている。

**無軸陶器（第17図16）** 16は調査区11で出土した無軸の陶器である。大甕の口縁部の破片で、大きく外方へ屈曲し、断面形はL字形を呈する。常滑産の赤ものと呼ばれる製品で、19世紀代のものと思われる。

#### 註

- 1) 三重県教育委員会1984『ハサマ遺跡発掘調査概要』
- 2) 第3次調査の調査区7～9については、調査計画段階で調査箇所を選定したものの、地形的な条件や他の調査区の調査成果等を鑑みて調査対象から除外したため、欠番となっている。

3) 磁器の文様名称については、以下の文献を参照した。

大橋康二1994『古伊万里の文様』 理工学社、大橋康二2009『蘭友猪口大事典』 講談社

4) 近世陶磁器の編年や曆年代報については、以下の文献を参照した。

大橋康二1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー-55 ニュー・サイエンス社、九州近世陶磁学会（編）2000『九州陶磁の編年』、（財）瀬戸市文化振興財团埋蔵文化財センター（編）2006『江戸時代のやきもの一生产と流通』記念講演会・シンポジウム資料集、東京大学遺跡調査室（編）1990『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3、中野晴久1986「近世常滑焼における甕の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』II 常滑市教育委員会、堀内秀樹1997『東京大学本郷構内の遺跡における年代の考察』『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室

## 第6節 平遺跡（第1次）

### （1）位置と調査前状況

平遺跡は、熊野市有馬町大島に所在する。ハサマ遺跡のすぐ南側に位置し、東側の尾根状の段丘上には高家城跡が存在する。

遺跡は、西側の山地から延びる尾根の先端部に形成された、若干の平坦面を中心と立地している。尾根の南北には小さな谷があり込んでいる。東側には産田川沿いに形成された氾濫平野及び後背低地が広がっているが、南側からこの低地へと流れ込む小規模河川によって南北方向に幅広の不整形な谷状地形が形成されており、調査地はその谷口付近に位置している。

調査前の現況は、果樹園及び山林、荒地であった。

### （2）調査成果

事業地内に11箇所の調査区を設定して調査を行った（第18図）。ほとんどの調査区は尾根上に位置するが、調査区4のみは尾根根部の深い谷状となった箇所に位置している。

**調査区1** 幅2m、長さ5mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する砂質土層で、径1~2cmの礫を多く含む。

**調査区2** 幅2m、長さ14mの調査区である。地表下約0.1mで地山面を確認した。地山は明褐色を呈す

る砂質土層で、礫を含む。表土は腐植土を主体としており、地山直上に堆積している。

**調査区3** 幅2m、長さ12mの調査区である。地表下約0.4mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する砂質土層である。

**調査区4** 幅2m、長さ13mの調査区である。地表下約0.4~0.9mで地山面を確認した。地山は調査区西端部付近では明黄褐色を呈しシルトを主体とする粘質土層であるが、調査区中央部付近では黒褐色を呈し、礫を含む粘質土層となっている。丘陵裾部に位置するため、他の調査区と土層の堆積状況が異なるものと思われる。

**調査区5** 幅2m、長さ12mの調査区である。地表下約0.4mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する砂質土層で、礫を含む。

**調査区6** 幅2m、長さ28mの調査区である。地表下約0.4mで地山面を確認した。地山は明赤褐色を呈する砂質土層で、礫を含む。

**調査区7** 幅2m、長さ24mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は明黄褐色を呈する砂質土層で、礫を含む。

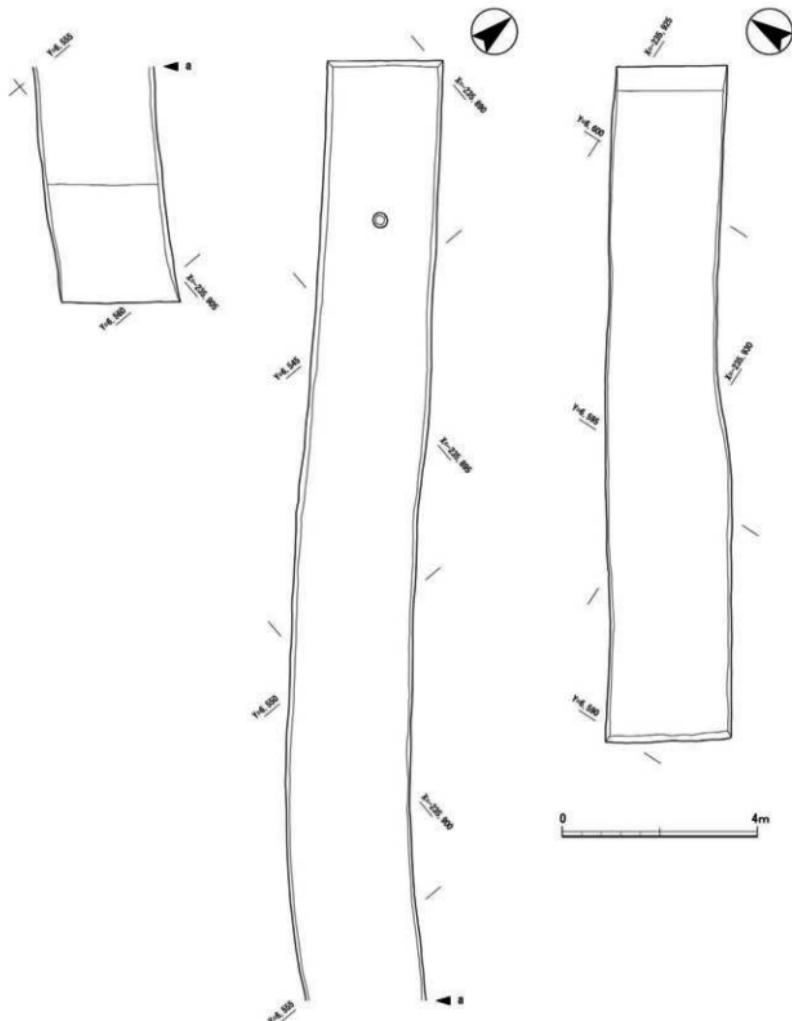
**調査区8** 幅2m、長さ24mの調査区である。地表下約0.2~0.4mで地山面を確認した。地山は褐色ないし明褐色を呈する砂質土層で、礫を含む。調査区北部については、表土は腐植土を主体としており、



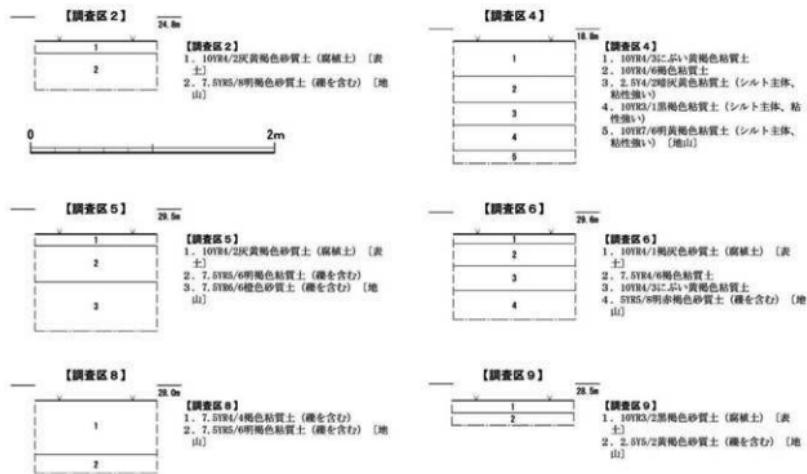
第18図 平遺跡調査区配置図 (1/2,000)

調査区 9

調査区 4



第19図 平遺跡調査区平面図 (1/100)



第20図 平遺跡土層断面図 (1/40)

地山直上に堆積している。

**調査区 9** 幅 2 m、長さ 23m の調査区である。地表下約 0.1~0.2 m で地山面を確認した。地山は黄褐色ないしにぶい黄褐色を呈する砂質土層で、礫を含む。表土は腐植土を主体としており、地山直上に堆積している。

地山面を精査した結果、調査区北部でビットを 1 基検出した。平面形は円形を呈し、径 0.28 m、深さ 0.05 m ほどである。非常に浅く、表土直下で検出さ

れた点を鑑みると、遺構ではない可能性もある。埋土中から遺物は出土しなかった。

**調査区 10** 幅 2 m、長さ 20m の調査区である。地表下約 0.2 m で地山面を確認した。地山は黄褐色を呈する砂質土層で、礫を含む。

**調査区 11** 幅 2 m、長さ 20m の調査区である。地表下約 0.2 m で地山面を確認した。地山は黄褐色を呈する砂質土層で、径 1~2 cm の礫を多く含む。

## 第7節 後呂地遺跡（第1・2次）

### （1）位置と調査前状況

後呂地遺跡は、熊野市有馬町山崎に所在する。平遺跡や堀ノ本遺跡と接し、東側の尾根状の段丘上には、山崎遺跡や高家城跡が存在する。

遺跡は、西側の山地から延びる尾根の先端部に位置しており、低平な段丘上及び、その裾部の沖積地に立地している。尾根の南北には小さな谷があり込んでいる。遺跡が所在する尾根の南側から東側にかけては小規模な河川に沿って幅広の不整形な谷状地形が形成されており、調査地の一部が立地する沖積地はその谷の内部に位置する。この谷状地形の東側には南北に尾根状の段丘が延び、さらに東側には産田川沿いに形成された氾濫平野及び後背低地が広がっている。

調査前の現況は、段丘上では山林及び宅地、荒地となっており、一部に果樹園もみられる。尾根裾部

では水田及び果樹園であった。

### （2）調査成果

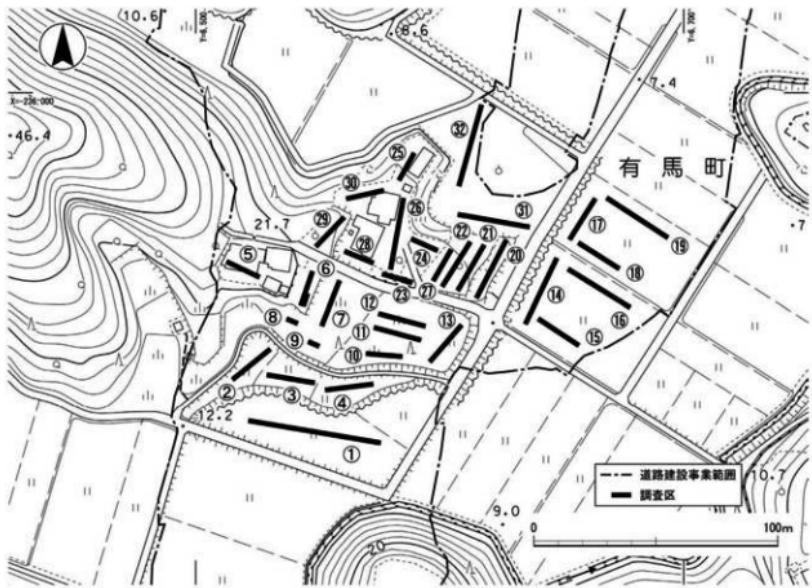
#### ①調査区

事業地内に32箇所の調査区を設定して調査を行った（第21図）。ほとんどの調査区は、尾根先端部の段丘上のやや小高くなった箇所に位置するが、調査区1・14～19・31・32は尾根裾部の沖積地に位置している。

なお、調査区の名称は第1次調査において調査区1～19とし、第2次調査では調査区1～13としたが、本報告にあたって第2次調査の調査区名称を変更し、第1・2次調査を通じた通番とした（第3表）。

**調査区1** 幅2m、長さ55mの調査区である。地表下約0.3mで地山面を確認した。地山は明黄褐色を呈する粘質土層である。

**調査区2** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表



第21図 後呂地遺跡調査区配置図 (1/2,000)

下約0.5mで地山面を確認した。地山は明黄褐色を呈する粘質土層である。

**調査区3** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.5mで地山面を確認した。地山は明黄褐色を呈する粘質土層である。

**調査区4** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.3mで地山面を確認した。地山は明黄褐色を呈する粘質土層である。

**調査区5** 幅2m、長さ15mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層である。

**調査区6** 幅2m、長さ15mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層である。

地山直上には褐色を呈する粘質土層からなる表土が堆積しており、その中に瓦片が多く包含されている様子が確認された。そして、地山面を精査した

第3表 後呂地跡遺調査区名対照表

調査次数	調査時	報告時
第1次	調査区1	調査区1
	調査区2	調査区2
	調査区3	調査区3
	調査区4	調査区4
	調査区5	調査区5
	調査区6	調査区6
	調査区7	調査区7
	調査区8	調査区8
	調査区9	調査区9
	調査区10	調査区10
	調査区11	調査区11
	調査区12	調査区12
	調査区13	調査区13
	調査区14	調査区14
	調査区15	調査区15
	調査区16	調査区16
	調査区17	調査区17
	調査区18	調査区18
	調査区19	調査区19
第2次	調査区1	調査区20
	調査区2	調査区21
	調査区3	調査区22
	調査区4	調査区23
	調査区5	調査区24
	調査区6	調査区25
	調査区7	調査区26
	調査区8	調査区27
	調査区9	調査区28
	調査区10	調査区29
	調査区11	調査区30
	調査区12	調査区31
	調査区13	調査区32

結果、調査区南部で瓦窯（S F 1）を1基検出した。瓦窯の一部は調査区外に出ていたため、調査区東側を若干拡張し、瓦窯全体を検出し、調査を行った。

検出した瓦窯の詳細については、後述する。

**調査区7** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層である。

**調査区8** 幅2m、長さ5mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層である。

**調査区9** 幅2m、長さ5mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層である。

**調査区10** 幅2m、長さ15mの調査区である。地表下約0.3mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層である。

**調査区11** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層である。

**調査区12** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層である。

**調査区13** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層である。

**調査区14** 幅2m、長さ30mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は灰色を呈する粘質土層である。

**調査区15** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は灰色を呈する粘質土層である。

**調査区16** 幅2m、長さ30mの調査区である。地表下約0.3mで地山面を確認した。地山は灰色を呈する粘質土層である。

**調査区17** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は灰色を呈する粘質土層である。

**調査区18** 幅2m、長さ20mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は灰色を呈する粘質土層である。

**調査区19** 幅2m、長さ30mの調査区である。地表

下約0.2mで地山面を確認した。地山は灰色を呈する粘質土層である。

**調査区20** 幅2m、長さ27mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色ないしは明黄褐色を呈する粘質土層で、礫を含む。

**調査区21** 幅2m、長さ22mの調査区である。地表下約0.2~0.4mで地山面を確認した。地山は橙色を呈しシルトを主体とする粘質土層で、径2~5cmの礫を含む。

**調査区22** 幅2m、長さ22mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈しシルトを主体とする粘質土層で、径2~5cmの礫を含む。

**調査区23** 幅2m、長さ13mの調査区である。地表下約0.3~0.4mで地山面を確認した。地山は黄褐色を呈しシルトを主体とする粘質土層である。

表土となる耕作土の下層には、暗灰黄色を呈し焼土を含む砂質土層や、淡黄色を呈し灰白色のシルトブロックを多く含む粘質土層が部分的に堆積してい

た。そして、地山面を精査した結果、調査区東部で瓦窯(SF2)を1基検出した。瓦窯の一部は調査区外に出ていたため、調査区の両側を若干拡張して瓦窯全体を検出し、調査を行った。

検出した瓦窯の詳細については、後述する。

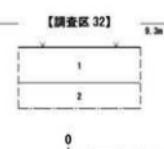
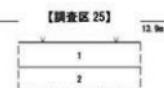
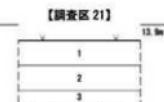
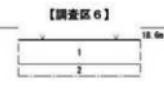
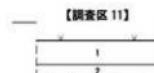
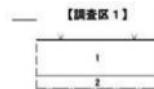
**調査区24** 幅2m、長さ12mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は明黄褐色を呈する砂質土層で、径2~5cmの礫を含む。

**調査区25** 幅2m、長さ13mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層で、礫を含む。

**調査区26** 幅2m、長さ30mの調査区である。地表下約0.3mで地山面を確認した。地山は黄褐色を呈する粘質土層で、礫を含む。

**調査区27** 幅2m、長さ15mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は橙色を呈しシルトを主体とする粘質土層で、径2~5cmの礫を含む。

**調査区28** 幅2m、長さ13mの調査区である。地表



第22図 後呂地遺跡土層断面図 (1/40)

下約0.1~0.2mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈しシルトを主体とする粘質土層で、径5~10cmの礫を含む。

**調査区29** 幅2m、長さ17mの調査区である。地表下約0.2~0.7mで地山面を確認した。調査区南部では、表土の黒褐色を呈する砂質土層の直下で明黄褐色を呈する砂質土層からなる地山を確認した。

一方、調査区北部では、表土下に明褐色を呈し礫を含む粘質土層や、褐色を呈し礫を含む粘質土層などが厚さ0.6mほどにわたって堆積しており、その下層で橙色を呈し礫を含む粘質土層からなる地山が確認された。当該調査区は建物付近に位置しており、北部の厚い堆積土層は造成土の可能性が高い。

**調査区30** 幅2m、長さ16mの調査区である。地表下約0.1mで地山面を確認した。地山は橙色を呈する粘質土層で、礫を含む。

**調査区31** 幅2m、長さ30mの調査区である。地表下約0.2~0.3mで地山面を確認した。地山は橙色ないし明褐色を呈する粘質土層で、礫を含む。

なお、調査区西部では表土直下に明黄褐色を呈し礫を含む粘質土層が厚さ0.4m以上堆積しており、

近現代の整地土と考えられる。地表下0.5mまでは掘削を行ったが、さらに深くまで整地土が続いている。遺構が存在したとしてもすでに滅失している可能性が高いため、途中で掘削を中止した。

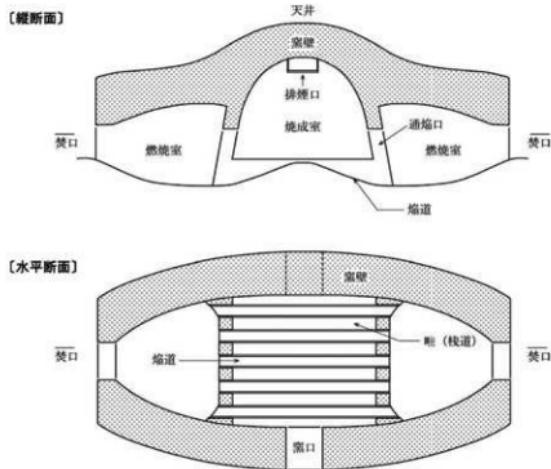
**調査区32** 幅2m、長さ35mの調査区である。地表下約0.2~0.9mで地山面を確認した。地山は黄褐色ないし明赤褐色を呈する粘質土層で、礫を含む。

調査区全体にわたって地山直上に表土となる明褐色を呈し礫を含む粘質土層が堆積していたが、地形的に低くなっている調査区南部では、厚さ0.9mとかなり厚く堆積していることが確認された。

## ②検出遺構

**S F 1 (第24図)** 調査区6で検出した近世～近代の瓦窯である<sup>11)</sup>。平面形が隅丸の三角形に近い土坑が2基隣接して検出され、その周囲に強い被熱が認められた。土坑の形状や配置、被熱範囲などからみて、平面形が長椭円形を呈し、左右の端部に焚口を有する、いわゆる達磨窯と判断される。規模は、内法で長さ4.8m、幅1.9mを測る。

窯の地上部の構造物は全て削平されており、全く



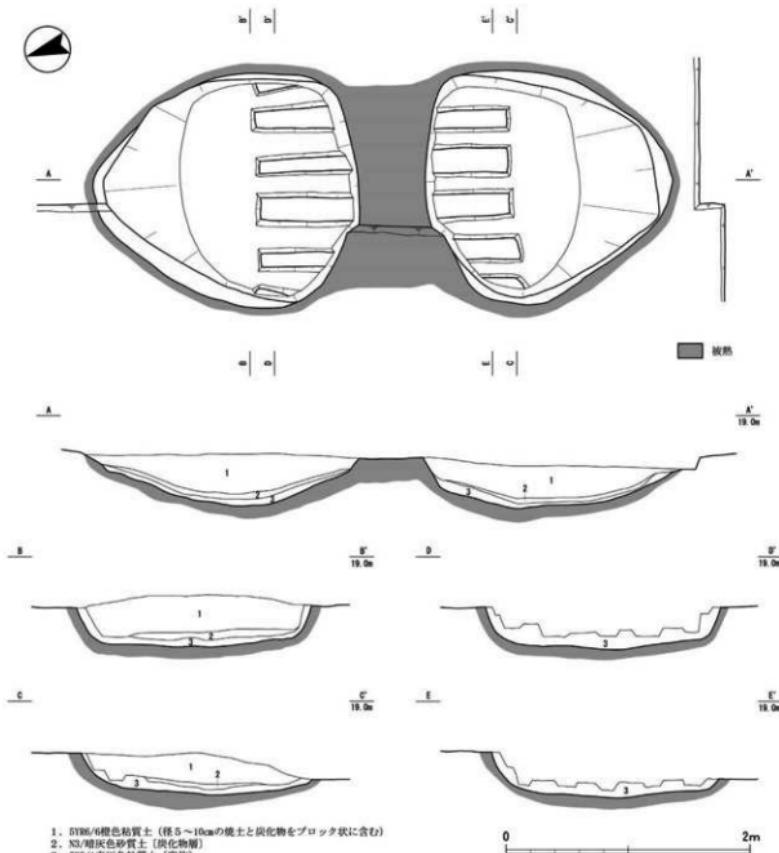
第23図 達磨窯様式図

痕跡を留めておらず、調査前に窯の存在を窺わせるものは認められなかった。

南北の燃焼室<sup>2)</sup>は、いずれも浅い皿状に地山を掘りくぼめ、その内面に粘質土を貼り付けて構築されている。この粘質土は焼成により焼け縮まっており、地上部へと立ち上っていく様子が看取され、地上部の構造物と一緒に窯体を形成していたものと思われる。瓦片や耐火レンガなどは含まれておらず、地上部の窯体構築にそうした材料が使用されていたか

は不明である。

焼成室は、南北の土坑内に4条ずつ畝を設け、中央部については0.5mほどの幅で地山を掘り残す形となっている。また、東西の窯壁に段状に取り付く形で、補助的な畦が設けられている。岸畦とも呼ばれるもので<sup>3)</sup>、おそらく、焼成室の幅いっぱいまで窯詰めを行うための工夫と思われる。畝の構築には窯体の構築に用いられているものと同様の粘質土が用いられており、瓦片や耐火レンガなどは使用され



第24図 後呂地遺跡 S F 1 (1/40)

ていなかった。そのため、窓の遺存状態はやや不良で、上部は崩落しているとみられる。

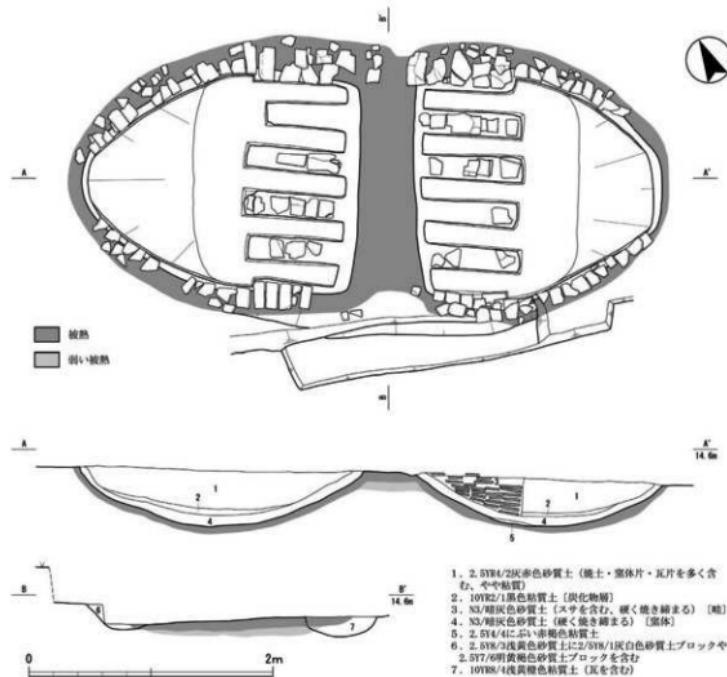
窓体内部からは、瓦の破片が複数出土した。この窓で焼成されたものか、地上部の窓体構築に用いられたものかは判然としない。出土した瓦は多くが棟瓦で、左棟瓦とみられるもので占められる。そのほか、熨斗瓦や丸瓦も認められた。なお、窓道具は出土していない。

**S F 2 (第25図)** 調査区23で検出した近世～近代の瓦窓である。平面形が隅丸の三角形に近い土坑が2基隣接して検出され、その周間に強い被熱とともに瓦が並べられている状況が確認された。土坑の形状や配置、被熱範囲、瓦の検出状況などからみて、平面形が長楕円形を呈し、左右の端部に焚口を有する、いわゆる達磨窓と判断される。規模は、内法で

長さ4.6m、幅1.8mを測る。

窓の地上部の構造物は全て削平されており、全く痕跡を留めておらず、調査前に窓の存在を窺わせるものは認められなかった。

東西の燃焼室は、いずれも浅い皿状に地山を掘りくぼめ、その内面に粘質土を貼り付けて構築されている。この粘質土は焼成により焼け縮まっており、地上部へと立ち上がってく様子が看取され、地上部の構造物と一連で窓体を形成していたものと思われる。地上部では窓体構築に粘質土とともに瓦片が用いられており、小口面を内側に向けた状態で並べられた瓦片が多數検出された。また、横断の土層断面をみると、南北両側に掘り込みが認められる(第25図第6・7層)。平面では被熱などのため明確に検出できていないが、埋土上面に窓の操業に伴う被



第25図 後呂地遺跡 S F 2 (1/40)

熱が認められることから窯体構築以前のものであり、窯体の構築に関わる地業の可能性が高い。

焼成室は、東西の土坑内に4条ずつ畦を設け、中央部については0.5mほどの幅で地山を掘り残す形となっている。また、SF1と同様に、南北の窯壁に段状に取り付く形で、補助的な畦が設けられている。畦の構築には窯体の構築に用いられているものと同様の粘質土とともに、瓦片が多量に用いられている。

窯体内からは、この窯で焼成されていたと考えられる瓦片はほとんど出土しなかった。出土した瓦は、ほぼ窯体構築に用いられていたもので、棟瓦、袖瓦、熨斗瓦など複数の種類がある。棟瓦には左棟瓦は認められず<sup>9</sup>、SF1とは異なるようである<sup>10</sup>。また、熨斗瓦が比較的多くみられるが、焼成後に割線で半裁されたものが使用されている。

瓦以外には、窯道具が複数出土している。ほとんどが西側の土坑内から出土した。瓦の下に敷いたと思われる湾曲した直方体のものと、瓦同士の融着を防ぐために間に噛ませる小型の逆凸字形のものの2種類がある。

### (3) 出土遺物

#### ① SF1出土遺物

瓦(第26・27図1~12) 1~12は瓦である。いずれも窯体内から出土している。

1は棟瓦で、完形である。窯体内から出土したが、他の瓦とは法量や櫛目などの点で差異がある<sup>11</sup>。また、被熱しておらず、雨漏り防止のために他の瓦との隙間を埋めたと考えられる樹脂系の接着剤や、屋根の葺土と思われる土塊が付着していることから、近隣の建物の屋根に葺かれていた可能性が高い。したがって、SF1と直接的に関係する瓦ではないと思われる。ただし、SF1・2出土の瓦との比較によって、後呂地遺跡の瓦窯の廃絶時期の一端を示し得るものと考えられる。

2~8も棟瓦で、窯体内から出土している。2は全形が把握できるもので、1より若干小型で、近現代の棟瓦で四六判とされるサイズのものに近い<sup>12</sup>。表面は平滑に調整されているが、裏面は調整が粗い。3~6は隅部分の破片である。切り込みが認められ

ず、2とは対称的な形状を呈するものと思われ、いわゆる左棟瓦と考えられる。表面は平滑に調整されているが、裏面の調整は比較的粗い。7・8も切り込みの位置から左棟瓦と考えられる。表面には工具ナデの痕跡が明瞭に残る。

9は丸瓦と思われる。表面には工具ナデの痕跡が筋状に明瞭に残る。裏面には布目痕が認められる。筋状の痕跡も残っており模骨痕のように見受けられるが、幅や痕跡の深さなどから、工具ナデによつてつけられた可能性が高い。

10~12は熨斗瓦と思われる。10は裏面に波状の櫛目を施している。11・12は裏面に直線状の櫛目を施す。12は側面にヘラ切りによって切り離したとみられる痕跡が残る。割線を入れて焼成後に割って半裁するのではなく、焼成前の未乾燥段階でヘラ切りによって半裁した可能性がある。

#### ② SF2出土遺物

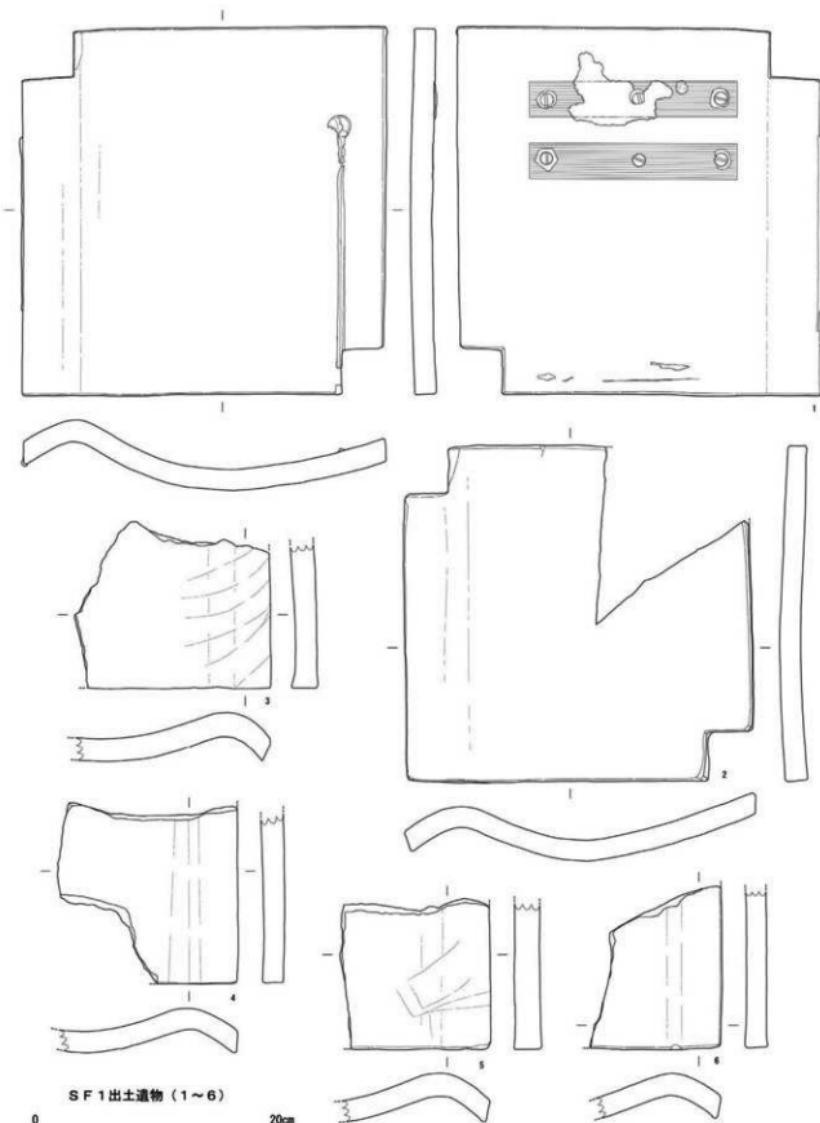
施釉陶器(第27図13) 13は施釉陶器である。窯体内から出土した。土瓶の注口で、体部から接合部で剥離している。外面には鉄軸が施されている。内面にはロクロナデが明瞭に残る。近代のものと考えられる。

瓦(第27・28図14~26) 14~26は瓦である。窯体内から出土したものと、窯壁の構築材として使用されていたものがあるが、窯体内から出土したものも、本来は構築材であった可能性が高い。

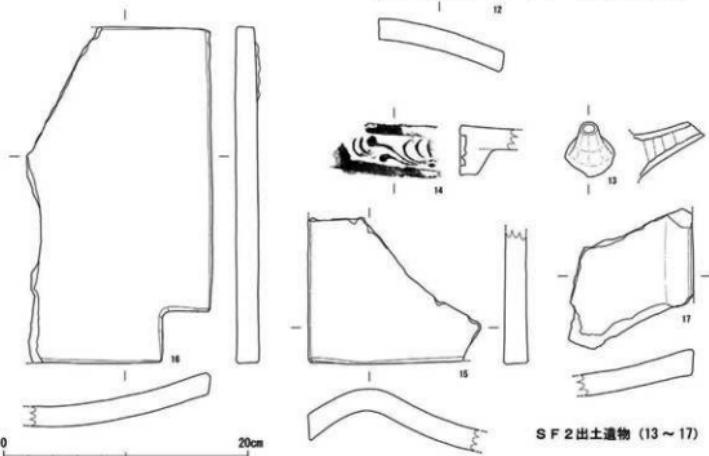
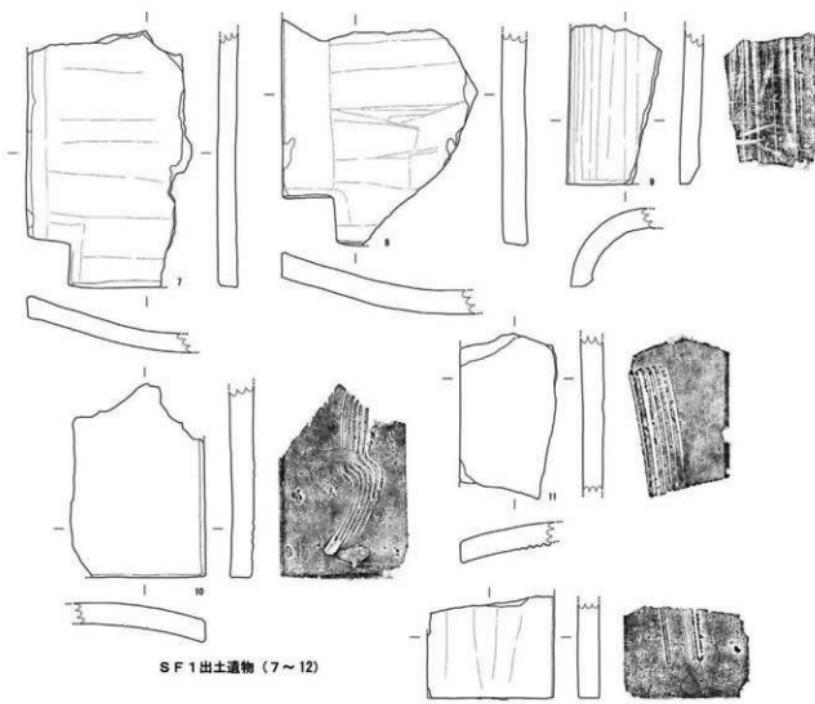
14は軒棟瓦である。瓦当の破片で、唐草文が認められる。

15~18は棟瓦である。15は隅部分の破片である。16は半分程度が遺存する。表裏面とも工具ナデによつて調整されており、一部では工具ナデがケズリ状になっている。17は表面がミガキによってかなり平滑に調整されている。全体に白化しており、一部に焼化の痕跡が残る。18は釘穴が1箇所残る。小片で、軒瓦や袖瓦の可能性も考えられる。裏面には窯壁が付着している。

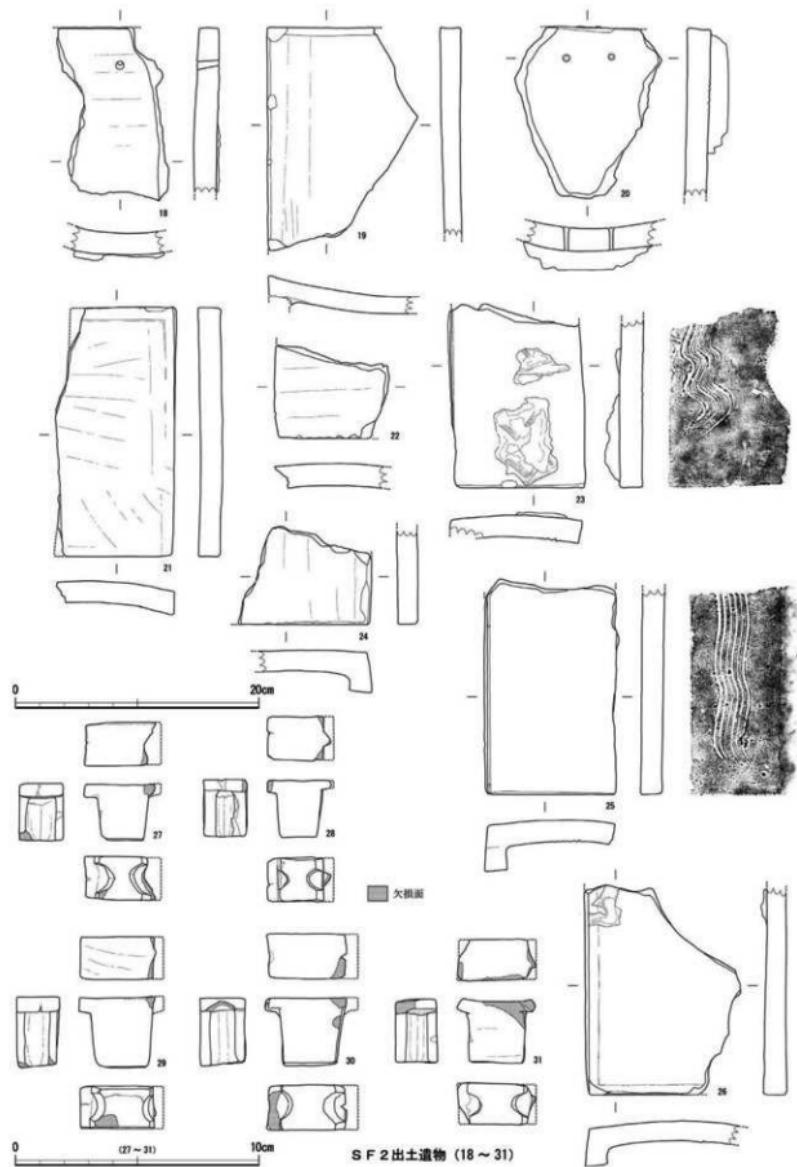
19・20は袖瓦である。19は袖重れが剥離している。剥離部分には、接合を強化するために太く短い沈線が多数施されている。20は畦の構築材として使用されていた。つり穴が2箇所に開けられており、また



第26図 後呂地遺跡出土遺物① (1/4)



第27図 後呂地遺跡出土遺物② (1/4)



第28図 後呂地遺跡出土遺物③ (1/2, 1/4)

裏面には櫛目が施されているなど、袖瓦以外の可能性も考えられる。全面が白化しており、焼化された痕跡を残さない。

21~26は熨斗瓦である。21はほぼ完形で、焼成後に割線で半裁されている。22も割線で半裁されている。23は裏面に波状の櫛目を施す。表面には、スサを含む窯壁が塊状に付着している。24~26は箱熨斗で、24は側縁に短い袖部を有する。25は割線で半裁した痕跡が認められる。裏面には波状の櫛目が施されている。また、袖部を接合した痕跡が破断面で観察できる。26は裏面に深く鋭い割線が残るが、その部分では割れていない。表面の一部に窯壁が付着している。

窯道具（第28・29図27~37） 27~37は窯道具である。いずれも窯体内から出土している。

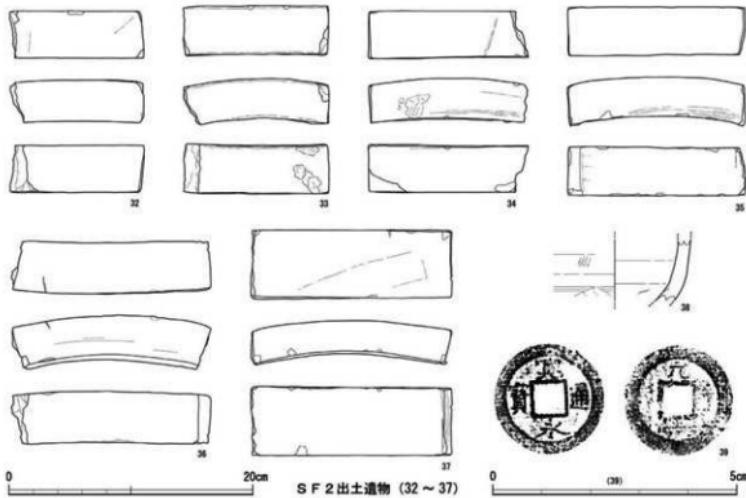
27~31は逆凸字形を呈し、両側面に幅広の溝状の抉りを有する<sup>17)</sup>。瓦質で、表面は焼化されている。窯詰め時に、瓦の間に噛ませて融着あるいは焼化のムラを防ぐために用いられたと考えられる。27・28はやや小型のものである。抉りの中心には、抉りを施した工具の刃の痕跡と思われるものが認められる。29はやや大型で、上面に不明瞭なナデが施されてい

る。30・31もやや大型のもので、抉りの上端基部付近に成形用いた工具の刃が食い込んだ痕跡が残る。また、31は上面が緩やかに湾曲している。

32~37は湾曲した直方体を呈する<sup>18)</sup>。瓦質で、表面は焼化されている。いずれも一方の小口面は平滑に整形されており、もう一方の小口面は折損したような状況を呈する。折損したような面も、基本的に他の面と同様の焼成を受けており、長いものを半裁して使用していたものと考えられる。窯詰め時に、瓦の下に敷いたものと推測される。ただし、瓦が融着した痕跡などは確認できず、実際にどのように置いたかは明らかではない。32・33は小型のものである。33の表面には窯壁のようなものがわずかに付着する。34~36はやや大型のものである。いずれも側面にコビキ痕と思われる筋状の痕跡がわずかに遺存している。35は内溝する面に強い工具ナデが認められる。37は大型で、幅広のものである。小口面にコビキ痕と思われる筋状の痕跡が明瞭に残る。

### ③その他出土遺物

須恵器（第29図38） 38は調査区30で出土した、須恵器と思われるものである。蓋の体部で、外面はロ



第29図 後呂地遺跡出土遺物④ (1/1, 1/4)

クロナデで調整しており、ロクロナデ前に施された平行タタキがわずかに残る。一部にはカキメや工具ナデも認められる。おそらく奈良時代～平安時代のものと考えられる。

**銭貨（第29図39）** 39は調査区26で出土した銅錢で、寛永通宝である。全体的に薄手で、背文として「元」の一字が鏄出されている。寛文年間以降に鑄造されたいわゆる新寛永の一種で、寛保元年（1741年）から延享2年（1745年）にかけて、大坂の天王寺村（高津新地）銭座で大量に鑄造された元字錢である<sup>9)</sup>。

#### 註

- 1) 近隣の住民からの情報に基づけば、当所では昭和15年頃まで瓦窯の操業が行われていたようである。ただし、操業開始時期や操業者、操業内容等については不明である。
- 2) 連磨窯の部分名称等については、第23図による。第23図の作成にあたっては下記文献を基にしたが、「棧道」とされている構造物については、「畦」という名称が一般的に使用されていると思われるため、本報告でも畦と呼称する。
- 岬町教育委員会・谷川瓦調査委員会1992『谷川瓦調査報告I』
- 3) 藤原学2001『連磨窯の研究』 学生社
- 4) 窯体構築に用いられていた瓦は、特徴的なもののみを選択して取り上げたため、全体的な様相は不明である。
- 5) 法量は、近現代の瓦で規格化とされるものに近い。坪井利弘1976『日本の瓦屋根』 理工学社
- 6) 前掲註5文献
- 7) 有限会社山三瓦工業の服部竜氏と服部洋氏のご教示によれば、伊勢地域北部では瓦の焼成に際して類似する窯道具が用いられており、「コザル」と呼ばれているとのことである。
- 8) 伊勢地域北部では瓦の焼成に際して類似する窯道具が用いられており、「ランマ」と呼ばれているとのことである。註7参照。
- 9) 郡司勇夫（編）1981『日本貨幣図鑑』 東洋経済新報社、小葉田淳1958『日本の貨幣』 至文堂、小葉田淳1981「銭座の銭座について—大坂高津新地の銭座—」『住友修史室報』第6号 住友修史室、新村出（編）2008『広辞苑（第6版）』 岩波書店

## 第8節 堀ノ本遺跡（第1次）

### (1) 位置と調査前状況

堀ノ本遺跡は、熊野市有馬町山崎に所在する。北側に隣接して後呂地遺跡が存在しており、調査地から北東側に向かって延びる尾根状の段丘上には山崎遺跡が存在している。また、遺跡の南端部には、七里御浜から横垣岬へと向かう熊野参詣道伊勢路が通っていたと推定される。

遺跡は、産田川沿いに形成された氾濫平野及び後背低地の南側を画する山地から、北へ向かって派生する尾根状の段丘上に立地する。調査地はその段丘の南端部の、幅が狭く細い尾根状になった箇所を中心位置している。段丘の北側から東側にかけては、産田川沿いに形成された氾濫平野及び後背低地が広がるが、中でも東側はかなり湿潤な様相を呈しており、古墳時代以前には潟湖が形成されていた可能性が高い。

調査前の現況は、果樹園及び荒地であった。

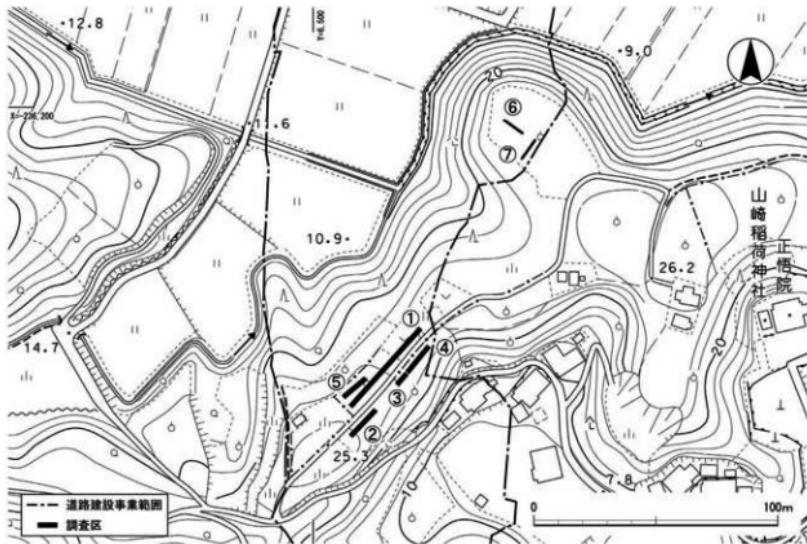
### (2) 調査成果

事業地内に7箇所の調査区を設定して調査を行った（第30図）。調査区1～5は細い尾根上に位置し、調査区6・7は調査区1～5からやや離れた、段丘上の平坦面に位置する。調査区6・7を設定した箇所では、段丘が北側へわずかに突出している。

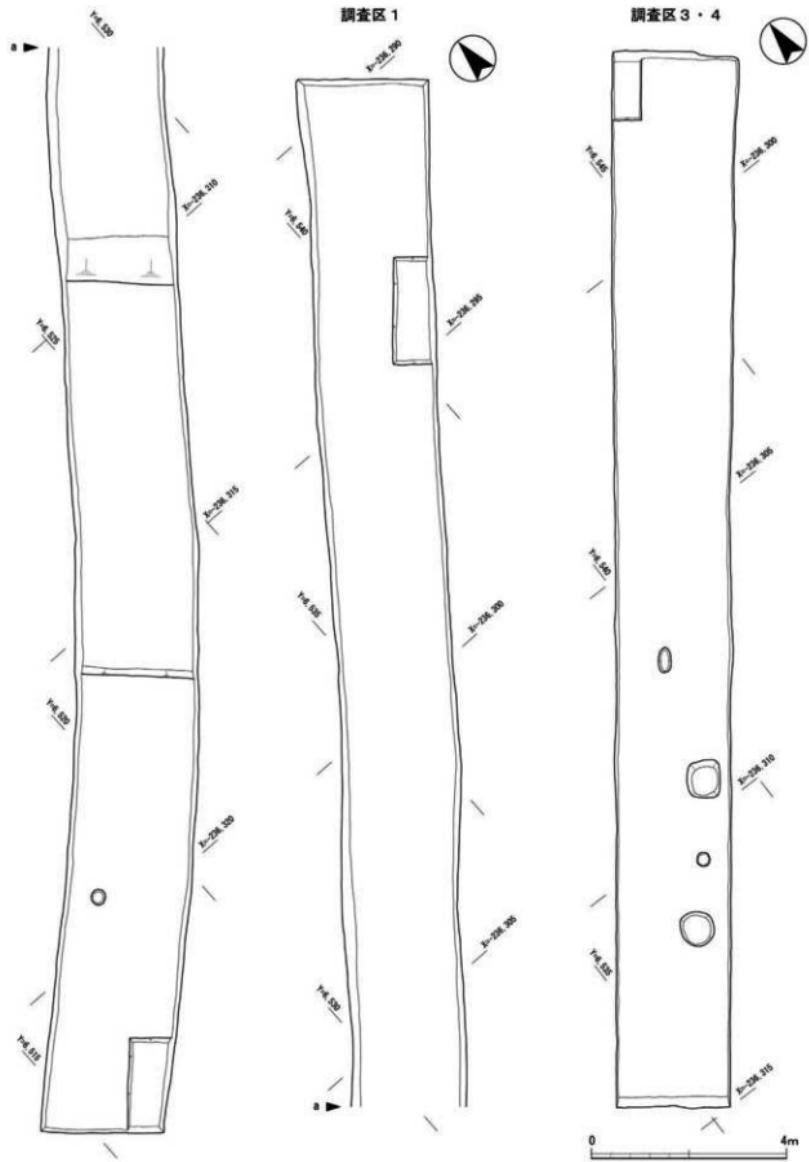
**調査区1** 幅2m、長さ43mの調査区である。地表下約0.1～0.3mで地山面を確認した。地山は黄橙色を呈する砂質土層で、径2cm程度の礫を多く含む。ただし、0.2～0.3mほどの深さで土質が変化しており、浅黄橙色を呈し径1cmほどの礫を多く含む砂質土層となっている。

地山面を精査した結果、調査区南部でピットを1基検出した。平面形は円形を呈し、径0.3m、深さ0.1mほどである。埋土中から遺物は出土しなかった。

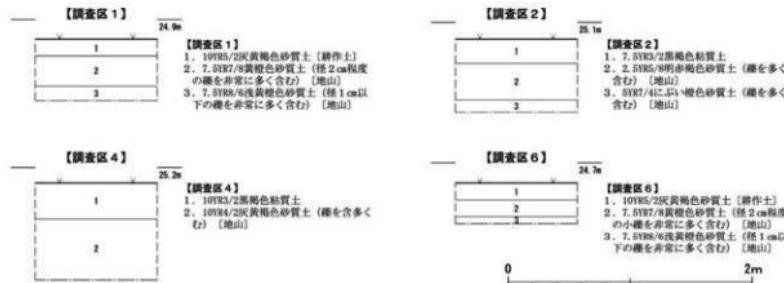
**調査区2** 幅2m、長さ15mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は明赤褐色を



第30図 堀ノ本遺跡調査区配置図 (1/2,000)



第31図 堀ノ本遺跡調査区平面図 (1/100)



第32図 堀ノ本遺跡土層断面図(1/40)

呈する砂質土層で、礫を多く含む。ただし、0.3mほどの深さで土質が変化しており、にぶい橙色を呈し礫を多く含む砂質土層となっている。

**調査区3・4** 調査区3と調査区4は個別の調査区として設定したが、掘削にかかる諸条件から隣接する位置となり、最終的には幅2m、長さ20mの調査区として一連で掘削を行うことになった。地表下約0.3mで地山面を確認した。地山は灰黄褐色を呈する砂質土層で、礫を多く含む。

地山面を精査した結果、調査区南部の、主に調査区3に該当する範囲でピットを4基検出した。最も南側のピットは平面形が円形を呈する大型のもので、径0.7m、深さ0.2mほどである。その北側に平面形が円形を呈し、径0.25m、深さ0.08mほどの小型のピットが位置し、さらにその北側に平面形が隅丸方形を呈し、径0.7m、深さ0.1mほどの大型のピット

が位置している。この3基のピットはほぼ一列に並ぶが、ピット同士の関係は不明である。そして、これらのピットから北側に若干離れて、平面形が楕円形を呈する、長径0.5m、深さ0.2mほどのピットが存在している。ピットの埋土中から遺物は出土しなかった。

**調査区5** 幅2m、長さ12mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄褐色を呈する砂質土層で、礫を多く含む。

**調査区6** 幅1m、長さ10mの調査区である。地表下約0.1mで地山面を確認した。地山は黄褐色を呈する砂質土層で、径2cm程度の礫を多く含む。

**調査区7** 幅1m、長さ10mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地山は黄褐色を呈する砂質土層で、径2cm程度の礫を多く含む。

## 第9節 目白遺跡（第1次）

### （1）位置と調査前状況

目白遺跡は、熊野市久生屋町目白に所在する。向イ地遺跡や久生屋奥地遺跡が南側に位置するが、付近に遺跡の存在はあまり知られていない。

遺跡は、西側に広がる山地裾部の緩斜面に立地する。調査地から東側へは、尾根状の段丘が延びている。北側へは細い谷があり込んでいる。

調査前の現況は、山林であった。

### （2）調査成果

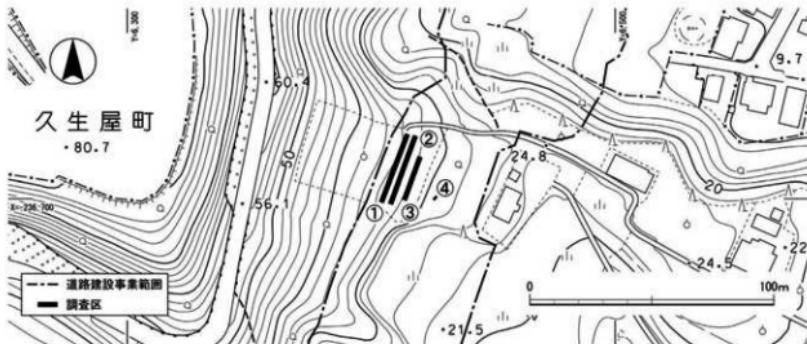
事業地内に4箇所の調査区を設定して調査を行った（第33図）。調査区1～3は丘陵裾部に等高線と併行するように設定した。調査区4のみ若干東側に離れて位置する。

**調査区1** 幅2m、長さ30mの調査区である。地表下約0.2～0.5mで径5mm以下の礫を含む褐色を呈す

る砂質土層が認められ、地山の可能性も考えられるが、確定的ではない。この層より下層には、黄橙色を呈する砂質土層や、にぶい赤褐色を呈し径1cm以下の礫を含む砂質土層が確認されている。にぶい赤褐色を呈する砂質土層は地表下約1.4mよりも深く統いており、少なくともこの土層については地山の可能性が高い。

**調査区2** 幅2m、長さ30mの調査区である。地表下約0.2mで地山面を確認した。地表下約0.2～0.4mで5mm以下の礫を含む褐色砂質土が認められ、地山の可能性も考えられるが、この土層が確認できない箇所もあり、確定的ではない。地表下約0.8mよりも下層には、にぶい赤褐色を呈し径5mm以下の礫を含む土層が調査区全体にわたって認められ、調査区1の最下層で確認された土層とも共通性が看取されるため、この土層については地山の可能性が高い。

**調査区3** 幅2m、長さ19mの調査区である。地表



第33図 目白遺跡調査区配置図 (1/2,000)



第34図 目白遺跡土層断面図 (1/40)

下約0.3～0.4mで5mm以下の礫を含む褐色を呈する砂質土層が認められ、地山の可能性も考えられるが、確定的ではない。この層より下層には、黄褐色を呈する砂質土層や、にぶい赤褐色を呈し径1cm以下の礫を含む砂質土層が確認されている。地表下約0.8mよりも下層で認められるにぶい赤褐色を呈する砂質土層については、地山の可能性が高い。

**調査区4** 幅1m、長さ2mの調査区である。調査地における諸条件から、小規模な調査区となった。地表下約0.3mで明褐色を呈する砂質土層が認められ、地山の可能性も考えられるが、確定的ではない。地表下約0.6mで、他の調査区でも検出されているにぶい赤褐色を呈する砂質土層が確認され、この土層については地山の可能性が高い。

## 第10節 向イ地遺跡（第1次）

### （1）位置と調査前状況

向イ地遺跡は、熊野市久生屋町向イ地に所在する。北側に自白遺跡、南側に久生屋奥地遺跡が存在する。付近にはそれ以外に遺跡はほとんど知られていないが、800mほど東側に位置する海岸沿いの砂堆上には仲の茶屋遺跡などが存在している。

遺跡は、西側に広がる山地裾部の緩斜面に立地する。調査地より東側には段丘が広がり、平坦地となっている。また、すぐ北東には小規模な谷が入り込んでおり、溜池が造られている。

調査前の現況は、宅地及び山林であった。

### （2）調査成果

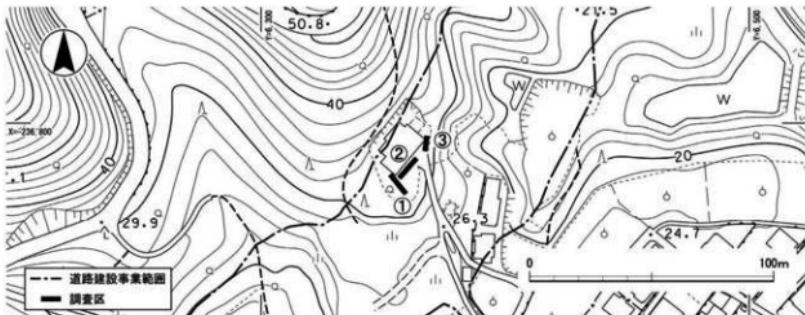
事業地内に3箇所の調査区を設定して調査を行った（第35図）。丘陵裾部のやや平坦になった場所で、家屋の基礎を避けて調査区を設定した。

調査区1 幅2m、長さ10mの調査区である。地表

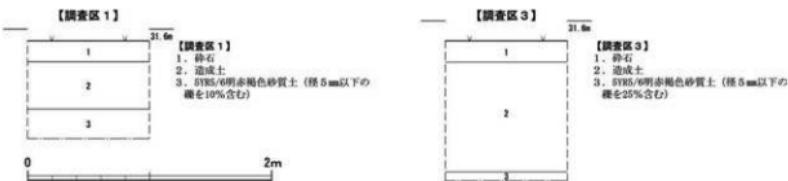
下約0.6~0.9mまで宅地造成時の盛土となっている。盛土には拳大の礫が混在していた。盛土より下層には、明赤褐色を呈する砂質土層が認められた。場所によって礫の含有状況に差異が認められ、これが地山かどうか確實には判断できなかった。

調査区2 幅2m、長さ10mの調査区である。地表下約1mまで宅地造成時の造成土となっている。調査区東部の造成土より下層には、明赤褐色を呈する砂質土層が認められた。調査区1とも共通し、地山の可能性が高いが、調査区西部では造成土の下層ににぶい褐色を呈する砂質土層が地表下約1.3mより深くまで認められ、様相が異なる。

調査区3 幅2m、長さ6mの調査区である。地表下約1.1mまで宅地造成時の盛土となっている。盛土より下層には、明赤褐色を呈し、径5mm以下の礫を多く含む砂質土層が認められた。他の調査区との共通性からみて、これが地山の可能性が高いが、確実ではない。



第35図 向イ地遺跡調査区配置図 (1/2,000)



第36図 向イ地遺跡土層断面図 (1/40)

## 第11節 久生屋奥地遺跡（第1次）

### （1）位置と調査前状況

久生屋奥地遺跡は、熊野市久生屋町奥地に所在する。北側に向い地遺跡や目白遺跡が存在するが、付近にはそれ以外に遺跡はほとんど知られていない。ただし、南東に500mほどの位置にある大前池東岸の低平な段丘や砂堆上には大前池A遺跡や大前池B遺跡が存在している。

遺跡は、西側に広がる山地裾部に形成された小さな谷状地形の谷口付近を中心に立地する。南側には北西の谷から流下し大前池に注ぐ、小規模な水路が存在している。東側には段丘が広がっており、扇状地状のごく緩やかな緩斜面となっている。

調査前の現況は、山林及び荒地であった。

### （2）調査成果

事業地内に3箇所の調査区を設定して調査を行つ

た（第37図）。調査区1・2は谷状地形の谷口部に位置し、調査区3はやや南側の若干低くなった場所に位置している。

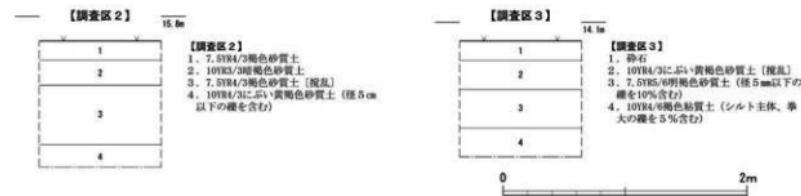
**調査区1** 幅2m、長さ25mの調査区である。地表下約0.7mで冲積層とみられる土層を確認した。明黄褐色を呈するシルトを主体とする土層で、地表下1.2mよりも深くまで堆積している。この土層の直上には黄褐色や灰褐色を呈し、礫を多く含む砂質土層が厚さ0.3~0.5mほどの厚さで堆積している。

**調査区2** 幅2m、長さ25mの調査区である。地表下約0.8mまでプラスチックなどを含む搅乱土層の堆積が確認された。その下層には、にぶい黄褐色を呈し、径5cm以下の礫を含む砂質土層が地表下約1.1mよりも深くまで堆積している。この土層の下部からは湧水が認められた。

**調査区3** 幅2m、長さ10mの調査区である。地表下約0.8mで冲積層とみられる土層を確認した。褐



第37図 久生屋奥地遺跡調査区配置図(1/2,000)



第38図 久生屋奥地遺跡土層断面図 (1/40)

色を呈するシルトを主体とする土層で、地表下1mよりも深くまで堆積している。ただし、下位では拳大の礫を含んでいる。この土層の直上には明褐色を

呈し、径5mm以下の礫を多く含む砂質土層が堆積している。

第4表 出土遺物一覧表

遺跡名	報告 番号	実測 番号	種別	器種	調査区	出土遺構	口径 長さ (cm)	高さ 幅 (cm)	重さ 厚さ (cm)	調整・文様等	色調	残存度	備考
釘抜遺跡	1	001-02	磁器	筒形瓶	—	表探	—	—	6.0	口クロナヂ、ロクロケズリ、染付	灰白2.5YR/2	1/12	
釘抜遺跡	2	001-01	陶器	小瓶	—	表探	—	—	4.6	ロクロケズリ、鉄輪	灰白2.5YR/1 輪:にぶい赤褐色SER/4	3/12	
岡地遺跡	1	001-03	陶器	小瓶	4	表土	10.7	—	—	ロクロナヂ、ロクロケズリ、鉄輪	灰白2.5YR/1 輪:にぶい赤褐色SER/3	1/12	
岡地遺跡	2	001-01	陶器	直?	3	表土	—	—	4.4	ロクロナヂ、蛇ノ目釉刻花、鉄輪	灰白2.5YR/1 輪:オーバー灰10YR/4/2	6/12	綱字
岡地遺跡	3	001-02	陶器	直?	4	表土	—	—	—	タキギ、オサギ、ナヂ	灰白10R/2/1 灰M4/	小片	広口直?
ハサマ遺跡	1	002-04	磁器	圓底小瓶	3	表土	6.6	—	—	ロクロナヂ、染付(側面 子文、紅葉文)、透明釉	灰白0W/1	3/12	
ハサマ遺跡	2	002-02	磁器	丸瓶	4	表土	10.0	—	—	ロクロナヂ、染付(草花文、 岩文)、透明釉	灰白2.5YR/1	4/12	
ハサマ遺跡	3	001-06	磁器	丸瓶	4	表土	10.6	—	—	ロクロナヂ、染付(草花文、 蘭草文、畫文、纏繩)、透 明釉	白N9/	3/12	
ハサマ遺跡	4	002-03	磁器	丸瓶	4	表土	—	—	3.7	ロクロナヂ、染付(網目文、 蘭草文)、透明釉	白N9/	12/12	
ハサマ遺跡	5	002-05	磁器	丸瓶	4	表土	8.8	5.0	3.7	ロクロナヂ、染付(竹雀文、 花卉文?)、透明釉	白N9/	6/12	
ハサマ遺跡	6	002-01	磁器	丸瓶	4	表土	10.4	5.8	4.1	ロクロナヂ、染付(草花文、 蝶文、寿字文、纏繩)、透 明釉	白N9/	9/12	
ハサマ遺跡	7	001-04	磁器	丸瓶	4	表土	9.8	5.4	5.5	ロクロナヂ、染付(網目文、 透明釉)	灰白5W/1	1/12	
ハサマ遺跡	8	001-06	磁器	丸瓶	4	表土	10.8	5.9	4.2	ロクロナヂ、染付(山水文、 帆掛け舟文、格子文、竹雀 文?)、透明釉	白N9/	2/12	
ハサマ遺跡	9	001-01	磁器	直	9	表土	10.2	2.7	5.2	ロクロナヂ、青磁輪	灰白10W/1 輪:明治灰10G/5/1	9/12	
ハサマ遺跡	10	003-01	磁器	直	4	表土	13.2	4.2	8.6	ロクロナヂ、染付(草花文、 丸龜甲文、帆掛け舟 文)、透明釉	白N9/	5/12	蛇目四隅扁台
ハサマ遺跡	11	001-03	陶器	丸瓶	4	表土	—	—	3.7	ロクロナヂ、ロクロケズリ、 鉄輪	にぶい黄橙10W/2/2 輪:暗灰SER/4	12/12	
ハサマ遺跡	12	003-02	陶器	直	4	表土	13.6	3.5	7.0	ロクロナヂ、染付(唐草文?)、 透明釉	浅黄橙10W/8/3	3/12	陶輪染付
ハサマ遺跡	13	001-02	陶器	直	3	表土	5.9	—	—	ロクロナヂ、ロクロケズリ、 鉄輪	浅2.5Y/7/3 輪:暗灰SER/4	4/12	
ハサマ遺跡	14	001-01	陶器	筒形香炉	1	表土	11.5	6.7	9.2	ロクロナヂ、ロクロケズリ、 鉄輪、墨底	浅黄橙10W/8/3 輪:明治灰5W/8	3/12	
ハサマ遺跡	15	001-03	陶器	漆利	9	表土	—	—	6.4	ロクロナヂ、鉄輪	赤茶2.5YR/6 輪:暗灰SER/2, SER/3	12/12	
ハサマ遺跡	16	001-02	陶器	甕	11	表土	62.0	—	—	ロクロナヂ、ナヂ	明茶2.5YR/5/6 灰SER/2, SER/4/2	2/12	
後呂地遺跡	1	008-01	瓦	桟瓦	6	SF1	30.0	29.6	1.7	工具ナヂ、ナヂ、羅日、押 印、焼化	灰M4/ 灰M5/ 灰M6/	完形	接着劑附着
後呂地遺跡	2	001-01	瓦	桟瓦	6	SF1	27.6	28.4	1.7	工具ナヂ、ナヂ、焼化	灰SER/5/1	—	瓦
後呂地遺跡	3	004-01	瓦	桟瓦	6	SF1	—	—	1.8	工具ナヂ、ナヂ、焼化	灰白2.5W/7/1	小片	左接瓦か
後呂地遺跡	4	003-01	瓦	桟瓦	6	SF1	—	—	1.7	工具ナヂ、ナヂ、焼化	灰白2.5W/7/1	小片	左接瓦か
後呂地遺跡	5	004-02	瓦	桟瓦	6	SF1	—	—	2.0	工具ナヂ	にぶい黄橙10W/7/3	小片	左接瓦か
後呂地遺跡	6	002-01	瓦	桟瓦	6	SF1	—	—	1.7	工具ナヂ、ナヂ、焼化	灰SER/1/ 灰SER/2, SER/6/2	小片	左接瓦か
後呂地遺跡	7	006-01	瓦	桟瓦	6	SF1	—	—	1.6	工具ナヂ、ナヂ、焼化	灰SER/2, SER/7/2	半欠	左接瓦か
後呂地遺跡	8	005-01	瓦	桟瓦	6	SF1	—	—	1.9	工具ナヂ、ナヂ、焼化	灰SER/2, SER/7/2	小片	左接瓦か
後呂地遺跡	9	006-02	瓦	丸瓦	6	SF1	—	—	1.7	工具ナヂ、ナヂ、ケズリ、 赤目焼、焼化	灰SER/2, SER/6/2	小片	
後呂地遺跡	10	007-01	瓦	契斗瓦?	6	SF1	—	—	1.8	工具ナヂ、羅日、焼化	灰SER/6/1	半欠	
後呂地遺跡	11	007-02	瓦	契斗瓦?	6	SF1	—	—	1.8	工具ナヂ、羅日、焼化	灰SER/2, SER/7/2	小片	
後呂地遺跡	12	005-02	瓦	契斗瓦	6	SF1	—	10.4	1.7	工具ナヂ、ヘラ切り?、羅 日、焼化	灰SER/5/1 輪:灰白SER/7/1	小片	
後呂地遺跡	13	010-02	陶器	土瓶	23	SF2	—	—	—	ロクロナヂ、鉄輪	にぶい銀7.5SER/7/3 輪:にぶい銀7.5SER/6/4	小片	
後呂地遺跡	14	010-01	瓦	軒枝瓦	23	SF2	—	—	1.7	工具ナヂ、ナヂ、唐草文、 焼化	灰M4/	小片	

遺跡名	報告 番号	実測 番号	種別	器種	調査区	出土遺構	口径 / 長さ (cm)	高さ / 幅 (cm)	重さ / 厚さ (cm)	調整・文様等	色調	残存度	備考
後呂地遺跡	15	003-02	瓦	板瓦	23	SF2	—	—	1.8	工具ナデ、ナデ、ミガキ、焼化	灰白5Y8/1 墨N2/	小片	
後呂地遺跡	16	001-01	瓦	板瓦	23	SF2	27.4	—	1.8	工具ナデ、焼化	灰N5/	半欠	
後呂地遺跡	17	009-02	瓦	板瓦?	23	SF2	—	—	1.7	工具ナデ、ミガキ	灰白10Y8/2	小片	
後呂地遺跡	18	009-01	瓦	板瓦?	23	SF2	—	—	1.8	工具ナデ、射穴、焼化	黄R2.5Y6/1	小片 軽瓦か板瓦? 黒墨付着	
後呂地遺跡	19	003-01	瓦	袖瓦	23	SF2	—	—	1.6	工具ナデ、ナデ、ミガキ、焼化	灰白2.5Y8/2 墨R3/	小片 接合沈縫あり	
後呂地遺跡	20	004-01	瓦	袖瓦?	23	SF2	—	—	1.8	工具ナデ、縦目、つり穴	灰白2.5Y8/2	小片 黒墨付着	
後呂地遺跡	21	002-01	瓦	蟹斗瓦	23	SF2	20.4	—	1.8	工具ナデ、割縫、焼化	灰N5/	—添 欠	
後呂地遺跡	22	009-03	瓦	蟹斗瓦	23	SF2	—	—	1.8	工具ナデ、割縫、焼化	にぶい 黄緑10Y8/2	小片	
後呂地遺跡	23	005-01	瓦	蟹斗瓦	23	SF2	—	—	1.8	工具ナデ、縦目、焼化	灰白2.5Y8/2	黒墨付着	
後呂地遺跡	24	001-02	瓦	蟹斗瓦	23	SF2	—	—	1.7	工具ナデ、ナデ、焼化	灰N4/	小片 黒蟹斗	
後呂地遺跡	25	006-01	瓦	蟹斗瓦	23	SF2	—	—	1.8	工具ナデ、縦目、割縫、焼化	灰N5/ 墨N4/	—添 欠	黒蟹斗
後呂地遺跡	26	004-02	瓦	蟹斗瓦	23	SF2	—	—	1.7	工具ナデ、ナデ、割縫、焼化	灰白N7/	半欠 黒蟹斗、窓型 付着	
後呂地遺跡	27	010-03	瓦製品	窓道具 (コザル)	23	SF2	2.3	—	1.8	工具ナデ、焼化	灰N5/	—添 欠	
後呂地遺跡	28	010-07	瓦製品	窓道具 (コザル)	23	SF2	2.4	—	1.8	工具ナデ、ナデ、焼化	灰N5/	—添 欠	
後呂地遺跡	29	010-04	瓦製品	窓道具 (コザル)	23	SF2	2.9	—	1.8	工具ナデ、焼化	灰N5/	—添 欠	
後呂地遺跡	30	010-06	瓦製品	窓道具 (コザル)	23	SF2	2.8	—	1.8	工具ナデ、焼化	灰N5/	—添 欠	
後呂地遺跡	31	010-05	瓦製品	窓道具 (コザル)	23	SF2	2.7	2.5	1.7	工具ナデ、ナデ、焼化	灰N5/	—添 欠	
後呂地遺跡	32	007-03	瓦製品	窓道具 (ランマ)	23	SF2	—	3.9	3.4	工具ナデ、焼化	灰N5/	小片	
後呂地遺跡	33	007-02	瓦製品	窓道具 (ランマ)	23	SF2	—	4.0	3.4	工具ナデ、焼化	灰N5/	小片	
後呂地遺跡	34	008-03	瓦製品	窓道具 (ランマ)	23	SF2	—	4.0	3.2	コビキ痕、工具ナデ、焼化	灰N5/	小片	
後呂地遺跡	35	007-01	瓦製品	窓道具 (ランマ)	23	SF2	—	3.8	3.3	コビキ痕、工具ナデ、焼化	灰N6/	半欠	
後呂地遺跡	36	008-02	瓦製品	窓道具 (ランマ)	23	SF2	—	4.0	3.2	コビキ痕、工具ナデ、焼化	灰10Y6/1	小片	
後呂地遺跡	37	008-01	瓦製品	窓道具 (ランマ)	23	SF2	—	5.6	2.7	コビキ痕、工具ナデ、焼化	灰N5/	小片	
後呂地遺跡	38	002-02	網底器	直	30	—	—	—	—	平行タキ、ロクロナデ、ミガキメタ?、工具ナデ	黄R2.5Y6/1 灰R2.5Y7/2	小片	
後呂地遺跡	39	006-02	網底器	鉢	26	表土	2.2	2.2	0.08	青文(「元」)	—	完形	寛永通宝

## 第IV章　まとめ

### 第1節　熊野市の海浜部における埋蔵文化財の様相

一般国道42号熊野道路建設事業に伴う発掘調査では、これまで本格的な発掘調査が僅少であった熊野市域の埋蔵文化財の状況を俯瞰する上で、いくつかの情報を得ることができた。

これまで調査対象地の周辺地域で把握されていた埋蔵文化財包蔵地の多くは、七里御浜の海岸沿いに形成された、長く続く浜堤上を中心に分布していた。それらのうち、発掘調査によって内容が判明したものはほとんどなく、主に縄文時代の遺物が採集されることなどによって存在が知られた跡である<sup>1)</sup>。

一方、浜堤の内側に形成された後背低地を臨む段丘上には、数回にわたる発掘調査によって弥生時代中期から室町時代にかけての遺物や構造が多数確認された津ノ森遺跡や<sup>2)</sup>、飛鳥時代から奈良時代の須恵器が出土した山崎遺跡などが存在する。

この後背低地の中でも特に湿潤な山崎沼と呼ばれる湿地は、古くは大前池などとつながる潟湖であったと考えられ、津ノ森遺跡などはそれに臨む港とも推測されている<sup>3)</sup>。

これまで、当該地域では津ノ森遺跡以外に古墳時代～室町時代の頗著な集落は確認されていないが、津ノ森遺跡の存在や、ハサマ遺跡で鎌倉・室町時代と考えられる遺物が出土していることなどから、産田川沿いの後背低地周辺の段丘上には、弥生時代から室町時代にかけての集落が点在していた可能性が考えられた。

**調査で得られた知見**　今回の発掘調査は、そうした後背低地に面する段丘上やその裾部、近辺の丘陵尾根上などに立地する遺跡が主体で（第39図）<sup>4)</sup>、これまで詳細が不明であった、それらの場所の埋蔵文化財包蔵地の実態を把握する絶好の機会となった。

そして調査の結果、これらの遺跡では奈良時代や平安・鎌倉時代に遡りうる遺物がごく少量出土し、何らかの人間の活動を窺わせる資料が得られたものの、縄文時代から近世に至るまで、明確な人の居住や生産活動等の痕跡は確認できなかった。したがつ

て、こうした潟湖や後背低地に面した高所は、各時代を通じて居住地や生産域として積極的に利用されることではなく、埋蔵文化財の存在は比較的希薄であることが判明した。

こうした見知からすれば、弥生時代から室町時代にかけては、津ノ森遺跡が立地する一定程度の広さの段丘上など、条件が良好な場所に局所的に集落が形成されていた可能性が高いだろう。

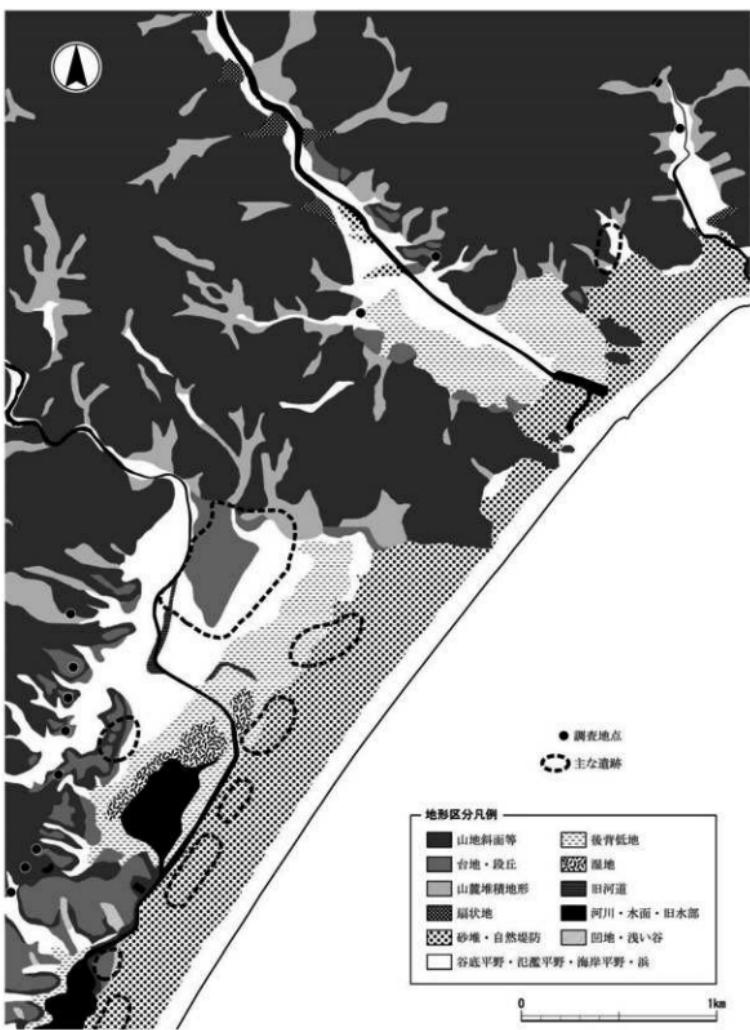
**古代・中世の集落**　しかしながら、当該地域においては、津ノ森遺跡を除いて、奈良時代から室町時代にかけての生活痕跡がいまだ不明瞭である点には注意が必要と思われる。

少なくとも中世に関しては、津ノ森遺跡付近を中心として井戸川や産田川流域を含む範囲に有馬荘という荘園が存在し、複数の集落が存在していたと推測されている<sup>5)</sup>。また、口有馬城跡や高家城跡などの城館跡がいくつか知られており、こうした城館に伴う集落も存在したとみるのが妥当だろう。現状では明らかになっていない、こうした集落の解明が課題といえる。

ただ、今回の調査によって、段丘上に古代・中世の集落が多数存在する可能性は低くなかった。それを踏まえれば、既に安定した陸地となっていたと考えられる浜堤上に集落の存在が求められそうであるが、浜堤上に採集されているのは主に縄文時代中期から後期にかけての土器や石器で、古代・中世の遺物の存在は頗著ではない。

これについては、現在、浜堤上には幹線道路沿いに住宅が広がり、それと重複しているため現時点で発見できていない可能性もある。または、これまでに調査が及んでいない、後背低地やその縁辺部の氾濫平野・海岸平野に集落が存在した可能性も考えうる。今後、こうした点を考慮した埋蔵文化財の保護や調査が望まれよう。

**江戸時代以降の様相**　一方、江戸時代以降には釘抜遺跡、岡地遺跡、ハサマ遺跡、後呂地遺跡で遺物・



第39図 地形区分と遺跡の立地 (1/25,000)

遺構が確認されるようになり、活動領域が広がることが窺われる。後呂地遺跡の達磨窯の存在などを鑑みれば、どちらかというと手工業、農業、林業などの生産活動の中で、低地に面した段丘上・丘陵上の土地利用が拡大していくものと推測される。

また、井戸川河口付近の浜堤上には奥熊野代官所が設けられ、周辺には市街地が形成される。産田川沿いの後背低地に面した浜堤上でも、熊野参詣道伊勢路に沿って集落が形成されていったと思われる。ただし、集落は花の窟から南側1kmほどの範囲にまとまり、南側の産田川に近接する箇所では、浜堤上は畠地として利用されていたようである。浜堤上の幹線道路沿いに広く町並みが形成され、現在に近い景観となっていくのは、戦後とみられる<sup>6)</sup>。

**小結** このように、一般国道42号熊野道路建設事業に伴って段丘上や丘陵尾根上の発掘調査を複数箇所で行ったことによって、熊野市の海浜部付近における

埋蔵文化財の実態の一端を明らかにし、考古学的な課題にも一步踏み込むことができた。これは、当該地域における今後の埋蔵文化財の保護や調査に際して、有用な情報となろう。

## 註

- 1) 熊野市1983『熊野市史』上巻
- 2) 熊野市教育委員会1980『津ノ森遺跡調査概要』、熊野市教育委員会1982『津ノ森遺跡発掘調査概要Ⅱ』、熊野市教育委員会1983『津ノ森遺跡発掘調査概要Ⅲ』、熊野市教育委員会1984『津ノ森遺跡発掘調査概要Ⅳ』
- 3) 徳積裕昌2000「紀伊半島東岸部の古代港と海上交通—記紀熊野関連説話成立の前提—」『Mie history』vol. 11 三重歴史文化研究会
- 4) 国土地理院の土地条件図を基に作成。
- 5) 伊藤裕徳2011『聖地熊野の舞台裏』 高志書院
- 6) 1947年に米軍によって撮影された航空写真を参照。

## 第2節 後呂地遺跡の達磨窯と瓦生産

後呂地遺跡の調査では、2基の達磨窯が確認された。確認された達磨窯は、2基とも地上部が削平されており、現地表面上に瓦の散布もみられず、調査前に瓦窯の存在を示すものは認められなかった。また、『熊野市史』等の文献上には、明治26年（1882年）の時点で南牟婁郡（現在の尾鷲市南部から紀宝町にかけての地域）に9軒の瓦屋の存在が示されているが、その所在地には不明な点が多く<sup>1)</sup>、調査地における瓦窯の存在を把握できるような情報もなかつた。

しかしながら、重機による表土掘削を行っていくと調査区6では地表下約0.2m、調査区23では地表下約0.3~0.4m地点で瓦窯が確認された。精査の結果、平面形や被熱状況などから達磨窯であると判断された。

達磨窯は、熊野市では初の事例となるもので、同地における近世から近代の瓦生産について明らかにする重要な手掛かりになると判断し、調査を行った。その結果、多くの成果を得ることができた。

この節では、確認された達磨窯の窯体構造とS F 2から出土した焼成時の窯道具について若干の検討を行い、調査成果のまとめとしたい。

### （1）窯体構造について

窯体構造を検討する前に、本調査で確認された達磨窯の概要について簡単にまとめたい。

#### 〔S F 1〕

- ・規模は長さ4.8m×幅1.9m
- ・地上部は削平
- ・皿状に地面を掘りくぼめる
- ・畦は4条／焼成室1室
- ・畦や窯壁に瓦・煉瓦は使用されていない

#### 〔S F 2〕

- ・規模は長さ4.6m×幅1.8m
- ・地上部は削平
- ・皿状に地面を掘りくぼめる
- ・畦は4条／焼成室1室
- ・窯壁は瓦と粘土の交積
- ・畦には瓦を使用

以下、規模、窯体構築、畦数に注目して、当該達磨窯の特徴や位置付けについて検討したい。

**規模** S F 1とS F 2は同規模である。規模を比較するために、日本各地における達磨窯の調査事例を第5表にまとめた。

江戸時代前期に操業していたとされる大阪府の大坂城跡や熊本県の平山瓦窯跡で確認された達磨窯の規模は長さ3m前後と小規模であるが、江戸時代後期以降になると長さは4.5~5.5mの範囲に収まる。藤原学は、この規模の規格化こそが達磨窯の特徴であるとし、古代～中世の平窯や窖窯にみられるような規模・構造差がないとしている<sup>2)</sup>。後呂地遺跡で確認された達磨窯の規模もこの規格に該当することから江戸時代後期以降に構築されたものと推測される。

**窯体構築** SF1とSF2では、窯体構築の方法に大きな差異が認められた。それは、SF2のみに窯体と畦に瓦が用いられていたことである。このことから、SF2はSF1よりも新しいと考えられる。

しかしながら、窯体に瓦を使用すること自体は古代の平窯等にも認められるため、評価は慎重にならざるをえない<sup>3)</sup>。また、各地で確認されている達磨窯をみても、江戸時代前期の窯で瓦と粘土を交互積みしている事例もあれば、江戸時代後期から明治時代にかけての窯では瓦を使用せず粘土だけ構築している事例もあるからである。つまり、窯体に瓦を使用しているかどうかだけでは時期の判断が困難といえる。

ただし、SF1では左棟瓦、SF2では右棟瓦の出土が目立つ点は考慮すべき視点であろう。もし、左棟瓦がSF1の地上部の窯体構築に使用されていたのならば、右棟瓦を主体として用いるSF2との間の時期差が、使用された瓦の違いとして反映されている可能性を見出すことも可能だろう。

時期以外の可能性としては、構築した工人の違い、窯によって生産する製品が異なっていたなどの可能性がある。しかしながら、確実に瓦窯内で焼成したと判断できる瓦がないことから、窯体構築にかかる差異について検討することは難しい。

**畦数** SF1とSF2の畦数はともに4条であった。この4条という数は、規模と同じく江戸時代後期に標準化していったものとされる<sup>4)</sup>。

しかし、明治時代中期には、三州瓦<sup>5)</sup>の職人たちが瓦生産の増強のために畦数を増加していったとされる<sup>6)</sup>。実際、愛知県高浜市に存在する高橋榮・秋人瓦窯の畦は6条あり、三州瓦の生産集団から影響

を受けていたとみられる三重県多気町の吉村忠雄瓦窯でも畦は5条設けられていた。こうした事例も含めて、三州瓦の窯は畦数を5条以上にすることを指向していたようである。

一方、後呂地遺跡で確認された達磨窯の畦は4条であることから、三州瓦の生産集団からの技術的な影響は受けていなかったと考えられる。

## (2) 窯道具

後呂地遺跡では、焼成時に用いた窯道具と考えられる瓦質の逆凸字形のものと瓦質の湾曲した直方体のものが確認された。窯道具の特徴と用途については、既に第III章第7節で述べた。ここでは、全国の出土事例をもとに、窯道具から後呂地遺跡の達磨窯における生産技術について検討を行いたい。

窯道具の事例は、瓦窯跡の報告に比べると少ない。これは実際に出土する事例が少ないのでなく、窯道具としての認識がなされていないことなどが問題にあるのだろう。そこで、達磨窯の発掘調査事例だけではなく、登窯や民俗例なども含めて瓦焼成に関わるであろうと考えられる窯道具をみていくたい。

**逆凸字形** 逆凸字形のものは、瓦同士の融着や焼化のムラを防ぐために間に噛ませていたと考えられる。同様な形状の事例としては大阪府の瓦屋町遺跡<sup>7)</sup>で出土したものがあり、共伴した瓦などから江戸時代後期頃の遺物と考えられる。また、民俗例ではあるが、明治時代から昭和時代に操業していた三重県の小林栄子瓦窯<sup>8)</sup>、京都府の中津川家<sup>9)</sup>、滋賀県の近江八幡製瓦工場<sup>10)</sup>などに同様な形状のものがある(第40図)。このうち、大阪府や京都府、滋賀県の事例では、鼓形の窯道具も併用していた。

一方、島根県<sup>11)</sup>や佐賀県<sup>12)</sup>では釘の形状に近いものを使用していた<sup>13)</sup>。この釘形のものの分布は、新潟県<sup>14)</sup>や秋田県<sup>15)</sup>でもみられることから、主に日本海側で広く用いられていたようである。この分布状況は、石州瓦<sup>16)</sup>の焼成技術の影響を受けた地域とほぼ一致する傾向にある。

以上のことから、瓦の間に噛ませる窯道具でも逆凸字形のものと釘形のものは分布が異なり、後呂地遺跡の瓦焼成技術は近畿圏の特徴を有していると考えられる。また、これらの窯道具は江戸時代以前か

第5表 遺産調査事例一覧表

通路	道路名	所在	通路名	規制	規制値	規制区分	規制区分		備考
							規制区分	規制区分	
【規制監視等】②									
内側道路	軒田原林田所	2号窓	5.3m×1.5m	2m	×	補正・瓦桶	補正・瓦桶	補正	
		4号窓	5.3m×1.9m	2m	×	瓦・スギ板	瓦・スギ板	補正	内側道路→外側 軒田原林田所→外側
		5号窓	4.2m×1.5~2.1m	4m	×	瓦・スギ板	瓦・スギ板	補正	内側道路→外側 軒田原林田所→外側
		6号窓	4.2m×1.7~1.9m	4m	×	瓦・スギ板	瓦・スギ板	補正	内側道路→外側 軒田原林田所→外側
東山崎幹線	福井県あらかわ	瓦窓	5.8m×1.9m	4m	×	瓦・スギ板	瓦・スギ板	補正	内側道路→外側 東山崎幹線→外側
福井市幹線	三箇塙船橋	1号窓	4.7m×2.4m	4m	×	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 福井市幹線→外側
後免池幹線	三箇塙船橋	S91	4.8m×0.9m	1m	×	板	板	補正	内側道路→外側 三箇塙船橋→外側
		S92	4.6m×1.1m	1m	×	瓦・板	瓦・板	補正	内側道路→外側 三箇塙船橋→外側
中北道路	延吉風呂野市	豊岡2	4.0m×1.8m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 延吉風呂野市→外側
平安京瓦窓	京都府京都市	豊岡3	4.0m×1.7m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 平安京瓦窓→外側
三条筋の京筋	京都府京都市	豊岡4	4.8m×1.9m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 三条筋の京筋→外側
出仕寺参道	京都府京都市	豊岡5	5.0m×1.9m以上	1.8m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 出仕寺参道→外側
大坂筋	大坂筋	大坂筋1	3.4m×1.7~1.9m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 大坂筋→外側
		1号窓	2.8m×1.5m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 大坂筋→外側
		2号窓	3.0m×1.5m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 大坂筋→外側
		3号窓	4.0m×1.7m以上	1.8m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 大坂筋→外側
		4号窓	2.5m×1.7m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 大坂筋→外側
		5号窓	3.0m×1.7m以上	1.8m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 大坂筋→外側
忍足越	忍足越	忍足越1	4.8m×2.4m	4m	×	黒漆切手	瓦・板	補正	内側道路→外側 忍足越→外側
		忍足越2	1.6m×1.7~1.7m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 忍足越→外側
平野V	平野V	平野V	5.0m×1.7m	2m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 平野V→外側
郡家今瀬筋	大坂筋高瀬筋	平野V	4.4m×1.7m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 平野V→外側
		平野V	4.9m×1.9m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 平野V→外側
		平野V	4.8m×1.9m	1m	不規	木・板	木・板	補正	内側道路→外側 平野V→外側
喜田通路	大坂筋高瀬筋	瓦窓	4.8m×2.4m	4m	不規	瓦・スギ板	瓦・スギ板	補正	内側道路→外側 喜田通路→外側
福嶺通路市道時	(SK779)	S1003	1.5m×1.7~1.8m	1m	不規	瓦・スギ板	瓦・スギ板	補正	内側道路→外側 福嶺通路市道時→外側

通路	所在	通路名	幅(奥行×側面)	壁	底面	高さ標識	横構造	深さ	対照	備考	報告書
古川筋	大森町河内曳野町	宝塚	2.7m×1.9m	斜平?	×	室外斜平	不明		江戸後綱	石材・石柱用	羽曳野市教育委員会2011「引曳野内道地蔵銘板調査報告書」平成23年版
平下筋	大森町河内曳野町	真室	1.8m(l)×2.2m	4巻	×	瓦・粘土板	地瓦		江戸中庭跡	粘土の繋ぎ足しあり(修復 鉄筋)	羽曳野市教育委員会2020「引曳野内道地蔵銘板調査報告書」平成22年版
三日市筋	大森町河内曳野町	ST7	4.9m×2.2m	4巻	×	斜平?	不明	地瓦	江戸		三日市筋跡
裏弘多筋	大森町河内曳野町	真室	4.6m×2.2m	斜平?	×	斜平	平瓦、瓦、瓦・瓦	明治後期~大正			大阪府教育委員会1995「大阪府文化財調査報告書」平成17年版
日清筋	兵庫県宝塚市	酒樽町	3.1m×1.2m	3巻	×	スサ張り粘土	不明	地平瓦			宝塚市教育委員会1963「新津川沿いの古跡」
西竹筋C地区	兵庫県三田市	瀬	5.1m×2.5m	4巻	×	粘土?	粘土?				神戸市文化局年報
如意筋	兵庫県芦屋市	—	3.7m×1.9m	4巻	不明	粘土	不明				兵庫県教育委員会1988「新津ダム建設に伴う発掘調査報告書」(2)一本木編
—	大釜玉筋	兵庫県尼崎市	1号筋	3.6m×2.0m	4巻	×	入サ張り粘土	地瓦、面戸瓦、鬼瓦	江戸		兵庫県教育委員会1996「大釜玉筋跡」
		2号筋	3.5m×2.0m	4巻	×	入サ張り粘土	粘土	平瓦、瓦瓦な	江戸		兵庫県教育委員会1997「大釜玉筋跡」
		3号筋	3.7m×2.0m?	4巻?	×	入サ張り粘土	地瓦		江戸		兵庫県教育委員会1998「大釜玉筋跡」
		4号筋	3.7m×2.0m?	4巻?	×	入サ張り粘土	地瓦		江戸		兵庫県教育委員会1999「兵庫市埋蔵文化財調査報告書 平成11年度」
平尾筋左京第一~第七 伝負筋負筋	兵庫八幡	S324	4.5m×2.5m	4巻	×	入サ張り粘土	地瓦	地瓦、瓦、平瓦、	江戸後綱	地瓦	兵庫市埋蔵文化財調査報告書 平成12年度
平尾筋右京西条三 伝負筋負筋	兵庫十日町	—	4.5m	不明	不明	不明	不明	地平瓦	江戸後綱	地瓦	兵庫市埋蔵文化財調査報告書 平成13年度
平尾筋右京西条三 伝負筋負筋	兵庫八幡	—	4.5m(l)×2.5m	4巻	×	入サ張り粘土	地瓦	地瓦、瓦、平瓦、	江戸後綱	地瓦	兵庫市埋蔵文化財調査報告書 平成14年度
通路筋1号筋	4.5m(l)×2.5m	4巻	×	斜平?	×	斜平?	不明	地平瓦	江戸後綱~明治	地瓦	兵庫市埋蔵文化財調査報告書 平成15年度
通路筋2号筋	1.6m(l)×2.0m	4巻	×	斜平?	不明	斜平?	不明	地瓦	江戸後綱~明治	地瓦	兵庫市埋蔵文化財調査報告書 平成16年度
通路筋3号筋	2.6m(l)×2.0m	4巻	○	瓦・粘土板	○	瓦・粘土板	不明	地瓦	江戸後綱~明治	地瓦	兵庫市埋蔵文化財調査報告書 平成17年度
通路筋4号筋	2.6m(l)×2.0m	4巻	○	地瓦、スサ張り粘土	瓦?	粘土	地瓦	地瓦	江戸後綱~明治	地瓦	兵庫市埋蔵文化財調査報告書 平成18年度
通路筋5号筋	2.6m(l)×2.0m	4巻	○	地瓦、スサ張り粘土	瓦?	粘土	地瓦	地瓦	江戸後綱~明治	地瓦	兵庫市埋蔵文化財調査報告書 平成19年度
通路筋6号筋	3.5m(l)×2.0m	4巻	×	地瓦	地瓦	地瓦	不明	地瓦	江戸後綱	地瓦	兵庫市埋蔵文化財調査報告書 平成20年度
小室寺	相模山城根本町	—	5.1m×1.9m	4巻	×	瓦張	地瓦				相模山城根本町住民会議報告書
相模山城根本町	相模山城根本町	瓦室	3.5m×1.8m	4巻	×	粘土	瓦・粘土の交差構	地瓦、平瓦など	江戸	地瓦	相模山城根本町住民会議報告書

通路	所在	通路名	幅(×長さ×高)	壁	底	高さ標識	断面概要	側底瓦	時間	備考	報告書
新規宮ノ渡邊跡	鳥取県米子市	—	不明	木構	瓦・粘土層	不明	特瓦、瓦瓦、瓦瓦な 瓦	瓦	江戸後期	一般財团法人米子文化財団2011 「鳥取官」の遺跡」	
		1号道路	3.3m×1.5m	3m	X	空室削平	粘土	特瓦、瓦瓦、瓦瓦な 瓦	不明		
平山大窓跡	鳥取県米子市	平山大窓跡	4.5m×2.2m	3m	X	瓦・粘土層	粘土	特瓦、瓦瓦、瓦瓦な 瓦	江戸前半	無本教育委員会1995「松岡山跡地・ 平山大窓跡」	
		3号道路	3.7m×1.8m	3m	X	粘土?	粘土	特瓦、瓦瓦、瓦瓦な 瓦	不明	鉄塔：八代城？	
【実測調査事例】											
高橋町・松川大窓跡	愛媛県高橋町	—	5.5m×3.5m	6m	○	雨六塊瓦・瓦瓦 上	雨六塊瓦	雨六塊瓦	不明	坂田町立博物館1994「『大正時代の通 路』」	
小林家瓦窯	三重県桑名市	—	6.1m×1.3m	4m	○	瓦・粘土の交互層	断六塊瓦	大正～昭和 初期	大正	久名市教育委員会2005「小林家瓦窯 瓦窯と瓦製瓦」	
生田御殿瓦窯	三重県松阪市	—	5.8m×2.0m	4m	不明	瓦・粘土層	粘土	特瓦、瓦瓦、瓦瓦な 瓦	不明	藤原学2001「遠野窯の研究」学生 会社	
吉井家瓦窯	三重県多気町	—	6.0m×3.0m	5m	X	瓦・粘土・粘土層	雨六塊瓦	雨六塊瓦	大正	鯖町教育委員会・谷川瓦窯報告 1「門 谷川瓦窯」	
門谷窯跡所瓦窯	大分県宇佐町	—	6.2m×3.2m	5m	X	土サギ瓦・粘土	瓦?	特瓦、瓦瓦、瓦瓦な 瓦	大正～昭和 初期	1992「門谷川瓦窯報告 1～門瓦窯跡 所、窯瓦古代～瓦器」	
坂本大窓代一瓦窯	大分県宇佐町	—	6.0m×3.0m	5m	○	雨六塊瓦・粘土層	雨六塊瓦	特瓦、瓦瓦、瓦瓦な 瓦	大正	藤原学1992「坂本大窓代一瓦窯 所、瓦窯研究」	
森山瓦窯	兵庫県姫路市	—	5.5m×3.4m	5m	X	瓦層：水火焼び 上層：火水焼び	不明	特瓦瓦	昭和瓦	藤原学2010「各川郷三倉井谷窯町瓦 窯所の近代化と瓦窯技術」	
東鍋屋瓦窯	香川県三豊市	—	6.5m×2.6m	4m	X	瓦・粘土の交互層	瓦・粘土の交互層	瓦	昭和	鳥取県の近代化と瓦窯技術「香川瓦窯」第 12号「香川瓦窯」	

表 1 実測調査事例。内の計測値、民謡を裏事例は、外の計測値。なお、小数点第四位は四捨五入を行った。

表 2 構造物について備考されている内容を記す。

※ 2 平原や世帯は縦く。



第40図 窯道具の地域的様相

室町・戦国	江戸	明治	大正	昭和	平成
平 窯	春日山瓦窑跡 (大阪府) 龍泉寺窑跡 (大阪府)	出窯跡 (三重県)			
登 窯	うその谷窑跡 (熊本県) 相向瓦窑跡 (新潟県)	音無瓦窑跡 (佐賀県)	城ヶ谷窑跡 (島根県)	城ヶ谷窑跡 (島根県)	瓦屋川窑跡 (島根県)
速 磨 窯	如意寺跡 (兵庫県) 旧清道跡 (兵庫県) 大阪城跡 (大阪府) 平山瓦窑跡 (熊本県)	窯道具の登場? 窯体構造に燒瓦の導入 窯道の導入 三州瓦窯の成立	後呂地窑跡 (三重県)	寺内地窑跡 (秋田県) 御家今城窑跡 (大阪府)	平安-kyō右京四条三坊十五坪・西三坊大路 (奈良県) 平城-kyō右京四条三坊十五坪・西三坊大路 (奈良県)

第41図 瓦窯の変遷

ら昭和時代に至るまで用いられたとみられる。

**湾曲した直方体** 湾曲した直方体のものは、瓦の下に敷いていたと考えられる。同様な形状の窯道具は、他の遺跡では確認するに至っていない。ただし、ガス窯による焼成ではあるが、三重県四日市市の近年の瓦工場では、湾曲しない直方体のものを焼成時に瓦の下に敷いていた<sup>10)</sup>。後呂地遺跡で出土したものの使用方法は、この四日市市の事例から類推したものであるが、湾曲の有無など差異もあり、同一の技術系統として捉えられるかは不明である。

これらの窯道具については、不明な点も多く、今後の発掘調査による出土事例の蓄積や民俗例の調査などを通じてさらに実態を明らかにしていくことが必要である。

### (3) 後呂地遺跡の達磨窯の評価

後呂地遺跡の構造・窯道具について、他地域で調査された達磨窯との共通性などを検討した。その特徴は、以下のようにまとめられる。

1. 窯の操業時期は、窯の形態や窯体に使用された瓦の特徴などから、明治時代から大正時代頃に比定される可能性が高い。

ただし、耐火煉瓦が窯の構築に使用されていない点から江戸時代まで操業が遡る可能性もある。耐火煉瓦は明治時代前期頃から窯構築材として一般的に使用されるようになったものである。

また、近隣の住民からの情報に基づけば、昭和15年頃まで瓦窯の操業が行われていたとのことである。よって、操業時期の下限の推定には慎重になった方がいいのかもしれない。

2. 後呂地遺跡の瓦焼成技術は、近畿圏の技術的影響の下にあった可能性が高い。

焼成室の畦数をみた場合、5本以上の畦を指向した三州瓦の特徴はみられず、後呂地遺跡の達磨窯は近畿圏の達磨窯に近い特徴をもっていたと考えられる。また、逆凸字形を呈する窯道具の分布からみても、近畿圏の影響を受けていた可能性が高いといえる。

3. 供給先については、刻印瓦の出土が認められなかったことや、文献資料にも記載がないことから不明である。

近隣の事例では、江戸時代後期頃に瀬戸村（熊野市井戸町）で生産された鬼瓦が熊野市有馬町に所在する海岸寺に葺かれていたことが知られている<sup>11)</sup>。このことは、熊野市域内で小規模な瓦生産が行われ、限られた範囲で流通していた事実を示す。後呂地遺跡で生産した瓦も熊野市域の寺院や民家に供給されていたと考えられる。

以上のように、これまで不明だった東紀州地域の瓦生産について、その一端を明らかにすることができたといえよう。今後は時代に拘らず、地域性という見地からも達磨窯や瓦生産に伴う窯道具の調査及び報告が必要であろう。

### 註

- 1) 熊野市1983『熊野市史』上巻
- 2) 藤原学によれば、明治時代以降の人々は、どの達磨窯も焼成室の規模がほぼ六尺四方を有することから、「六六窯」とも呼んでいたとされる。このことからも達磨窯は規格化されたものであったことが読み取れる。藤原学2001『達磨窯の研究』 学生社
- 3) 特に、平窯の窯体には瓦の使用例が多く認められる。例として、奈良県の歌垣瓦窯跡や京都府の大山崎瓦窯跡などがあげられる。
- 4) 前掲註2文献
- 5) 三州瓦は現在の愛知県中部で生産されていた瓦で、焼瓦で施釉されていないものである。下中弘1996『やきもの事典』 平凡社
- 6) 吹田市立博物館1997『達磨窯—瓦匠のわざ400年—』
- 7) 財団法人大阪市文化財協会2009『瓦屋町遺跡発掘調査報告』
- 8) 小林栄子瓦窯の調査報告に掲載された写真に、逆凸字形の窯道具を使用している様子が見受けられる。桑名市教育委員会2005『小林栄子瓦窯実測調査報告』
- 9) 中津川家の事例は、印南敏秀によって紹介されている。第40回の窯道具も同文献から再トレースしたものである。印南敏秀1986「南山城の瓦づくり」『山城郷土資料館報』第4号 京都府立山城郷土資料館
- 10) この事例は、近江八幡市のかわらミュージアムに展示していたものである。
- 11) 江津市教育委員会2003『矢源田窯跡』
- 12) 佐賀県教育委員会2012『平島遺跡・大野遺跡2・フ

- ルタ遺跡・音無瓦窯跡』
- 13) 釘形の窯道具は、「ハセ」と呼ばれていたことが註<sup>11</sup>の文献内にある「都野津町瓦工場訪録」で報告されて いる。
- 14) 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団2003『堀向瓦 窯跡9』 新潟県教育委員会
- 15) 秋田市教育委員会・秋田城跡発掘調査事務所1991『寺内焼窯跡』
- 16) 石州瓦は現在の島根県中部で生産されていた瓦で、 施釉された木棟の赤瓦のことである。下中弘1996『や きもの事典』 平凡社
- 17) 有限会社山三瓦工業の服部竜大氏と服部洋氏のご教 示による。
- 18) 伊藤裕偉2017『近世瓦の刻銘から人と地域の諸相を 読む』『三重県史研究』第32号 三重県環境生活部文化 振興課県史編纂室

### 第3節 結語

今回の一般国道42号熊野道路建設事業に伴う埋蔵 文化財発掘調査によって得られた、埋蔵文化財に関する多くの情報は、本報告で述べてきた通りである。 熊野市を含む東紀州地域は、熊野参詣道伊勢路が 通るなど、中・近世にかけて人々の往来が盛んになっ ていく。そしてまた、主に近世以降には、林業、漁業、あるいは果樹栽培を中心とする農業など、地理 的な特色を活かした産業が発展していった<sup>11</sup>。しか しながら、中世以降のこうした地域社会の具体的な 様子は、わずかに残された文献資料などから窺うし かなかつた。

そうした中で、今回の発掘調査によって得られた 広域的な埋蔵文化財に関する情報は、中・近世の地 域社会の様相を、埋蔵文化財という材料から復元し ていくための、新たな手がかりとなりうる。

特に、後呂地遺跡で検出された2基の達磨窯の調 査は、重要な情報をもたらした。後呂地遺跡の達磨 窯は、おそらく明治時代以降の近代のものと考えら れるが、近世から近代にかけての達磨窯は今では全 国的には姿を消し、地下に遺構を留めるのみで、 その生産技術や商品流通に関する詳細を知ることは 困難となっている。しかしながら、中世以来使われ てきた達磨窯は、瓦生産ないしは窯業の技術・組織 等の系譜や変化を、中世から近・現代という長いス パンの中で跡づけることが可能な遺構であり、工業 史上も重要といえる。そのため、近世から近代にかけ ての達磨窯は、今や埋蔵文化財の発掘調査対象と されることが多くなっており、各地で記録保存が行 われている<sup>12</sup>。

東紀州地域においても、すでに達磨窯を用いた瓦 生産は途絶え、地元で社寺・家屋等の建築や補修に 用いる瓦の生産が行われていたことも、人々の記憶 から消えつつある<sup>13</sup>。

こうした、今まさに失われつつある地域の生産活 動、いわば身近な生活の一端を、発掘調査によって 薫らせ、遺構の記録保存として残せることにも<sup>14</sup>、 達磨窯の埋蔵文化財としての価値を見出すことがで きるだろう。

今回の発掘調査で得られた埋蔵文化財に関する記 録が、将来にわたって地域の記憶を留め続ける文化 財の一つとして、さらに活用していくことを祈念 したい。

#### 註

- 1) 熊野市1988『熊野市史』中巻
- 2) 第5表参照。
- 3) 昭和15年(1940年)の『三重県統計書』に拠れば、 この段階で南牟婁郡には6箇所の瓦生産工房が存在す るに過ぎず、翌年には3箇所と半減している。また、 1988年刊行の『熊野市史』の民俗篇の生産に関する項 には、瓦生産に関する記載はなく、瓦生産に対する記 憶の薄れを窺わせる。ただ、紀宝町では戦後すぐまで 達磨窯による瓦生産が行われていたようである。
- 4) 三重県1942『昭和15年 三重県統計書』第2編、三重 県1943『昭和16年 三重県統計書』第2編、熊野市1988 『熊野市史』下巻、鵜殿村1994『鵜殿村史』通史編
- 4) 当然ながら、場合に応じて遺構自体の保存を図るこ とも必要である。

# 写 真 図 版



写真図版 1



山口遺跡調査区 6 全景（南から）



山口遺跡調査区 8 全景（東から）



釘抜遺跡調査区 1 全景（北から）



釘抜遺跡調査区 2 全景（西から）



釘抜遺跡調査区 1 ピット（南から）



釘抜遺跡調査区 2 ピット（東から）



釘抜遺跡調査区 2 土層（南から）



釘抜遺跡出土遺物

## 写真図版 2



岡地遺跡調査区3 全景（西から）



岡地遺跡出土遺物



立尾遺跡調査区2 全景（南から）



立尾遺跡調査区3 全景（南から）



ハサマ遺跡調査区3～5（北から）



ハサマ遺跡調査区10全景（南から）



ハサマ遺跡調査区14全景（北から）



ハサマ遺跡調査区15土層（南から）



1



2



3



4



5



6



8



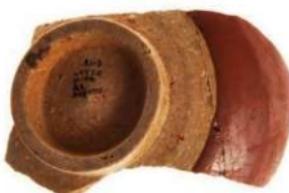
9

ハサマ遺跡出土遺物

写真図版 4



10



11



12



14



15



16

ハサマ遺跡出土遺物



平遺跡調査区 9 全景（東から）



平遺跡調査区 6 土層（西から）



後呂地遺跡 S F 1 完掘状況（北から）



後呂地遺跡 S F 1 完掘状況（南から）

写真図版 6



後呂地遺跡 S F 1 南半部（東から）



後呂地遺跡 S F 1 焼成室北側（北から）



後呂地遺跡 S F 1 窯口周辺（西から）



後呂地遺跡 S F 2 検出状況（西から）

写真図版 8



後呂地遺跡 S F 2 完掘状況（西から）



後呂地遺跡 S F 2 完掘状況（東から）

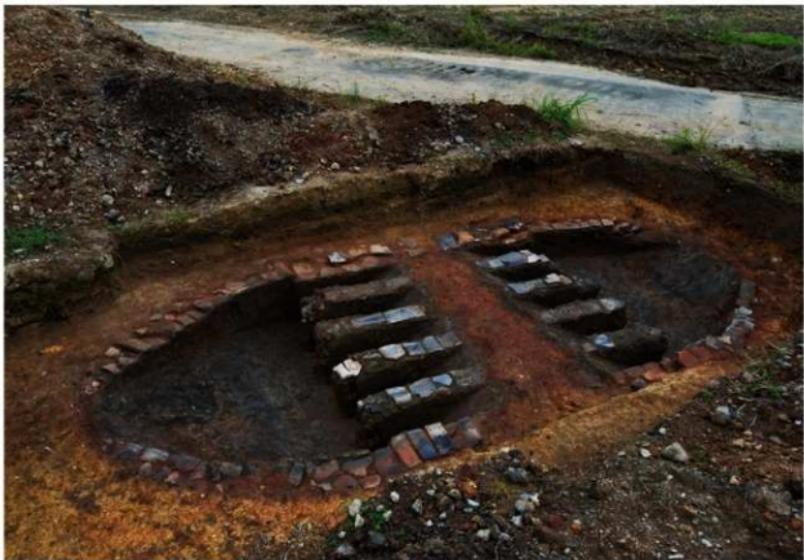


後呂地遺跡 S F 2 西半部土層断面（南から）



後呂地遺跡 S F 2 東半部土層断面（北から）

写真図版10



後呂地遺跡 S F 2 完掘状況（南から）



後呂地遺跡 S F 2 完掘状況（北から）



後呂地遺跡 S F 2 焼成室西側アップ（北から）



後呂地遺跡 S F 2 烧成室構築状況（北から）



後呂地遺跡 S F 2 西側燃烧室体構築状況（北から）



1表面



1裏面



2



3



4



5



6



7

後呂地遺跡出土遺物

写真図版12



8



9表面



9裏面



10



11



12



13



14

後呂地遺跡出土遺物



15



16



17



18



19表面



19裏面



20



20窯壁付着状況

後呂地遺跡出土遺物

写真図版14



21



22



23



24



25表面



25裏面



26表面



26裏面

後呂地遺跡出土遺物



29



30



31



28



27



37



36



35



33



34



32

後呂地遺跡出土遺物

写真図版16



29



30



35コビキ痕



35凹面



37コビキ痕



38



39銭面



39背面

後呂地遺跡出土遺物



堀ノ本遺跡調査区5 全景（西から）



堀ノ本遺跡調査区1 土層（西から）



目白遺跡調査区3 全景（南から）



目白遺跡調査区2 土層（東から）



向イ地遺跡調査区1 全景（北から）



向イ地遺跡調査区2 土層（西から）



久生屋奥地遺跡調査区2 全景（南から）



久生屋奥地遺跡調査区2 土層（西から）

# 報告書抄録

ふりがな	いっぽんこくどうよんじゅうにごくまのどうろけんせつじょうにともなうまいぞうぶんかざいはくつちょうきほく						
書名	一般国道42号熊野道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	415						
編著者名	石井智大・小山憲一・鍛木厚太						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732						
発行年月日	2023年2月17日						
しょしゅみせきの 所収遺跡名	しょざいち 所 在 地	コ ー ド	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
やまとくいせき 山口遺跡	三重県熊野市 木本町新田	a129	33° 53' 55"	136° 06' 15"	20190703～ 20190725	180	一般国道42号 熊野道路建設 事業
こばねきいせき 釣抜遺跡	三重県熊野市 井戸町柑屋地	a130	33° 53' 34"	136° 05' 29"	20190726～ 20190731	188	
まいたくいせき 岡地遺跡	三重県熊野市 井戸町岡地	a131	33° 53' 26"	136° 05' 13"	20200820～ 20201021	262	
かておいせき 立尾遺跡	三重県熊野市 有馬町大島	a133	33° 52' 36"	136° 04' 16"	20190731～ 20190807	170	
はさまいせき ハサマ遺跡	三重県熊野市 有馬町山崎	a116	33° 52' 28"	136° 04' 17"	20180709～ 20180710 20190808～ 20190819	第2次 170 第3次 200	
ひらいせき 平遺跡	三重県熊野市 有馬町大島	a134	33° 52' 23"	136° 04' 15"	20190822～ 20190903	386	
こうろいせき 後呂地遺跡	三重県熊野市 有馬町山崎	a135	33° 52' 18"	136° 04' 16"	20181015～ 20181024 20190903～ 20190920	第1次 800 第2次 530	
はりのもといせき 堀ノ本遺跡	三重県熊野市 有馬町山崎	a136	33° 52' 11"	136° 04' 14"	20190820～ 20190822	200	
めごろいせき 目白遺跡	三重県熊野市 久生屋町目白	a137	33° 51' 59"	136° 04' 10"	20210525～ 20210727	160	
むかわいせき 向地遺跡	三重県熊野市 久生屋町向地	a138	33° 51' 54"	136° 04' 08"	20210525～ 20210727	52	
くしまおくいせき 久生屋奥地遺跡	三重県熊野市 久生屋町奥地	a139	33° 51' 52"	136° 04' 05"	20210525～ 20210727	120	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山口遺跡	散布地	近世	なし	なし	
釘抜遺跡	散布地	近世	溝、ピット	陶器	
岡地遺跡	散布地	中世～近世	なし	陶器	
立尾遺跡	散布地	近世	なし	なし	
ハサマ遺跡	散布地	中世～近世	なし	陶器、磁器	
平遺跡	散布地	近世	なし	なし	
後呂地遺跡	生産遺跡	古代・近世～近代	瓦窯	須恵器、陶器、瓦、窯道具、銭貨	近代の達磨窯
堀ノ本遺跡	散布地	近世	ピット	なし	
目白遺跡	散布地	近世	なし	なし	
向イ地遺跡	散布地	近世	なし	なし	
久生屋奥地遺跡	散布地	近世	なし	なし	
要旨	一般国道42号熊野道路建設事業に伴って、影響を受ける11遺跡について発掘調査を行った。複数の遺跡で近世を中心とする遺構や遺物が確認され、東紀州地域における丘陵縁辺部を中心とした埋蔵文化財の様相を把握することができた。また、後呂地遺跡では近代の瓦窯（達磨窯）を2基検出し、近世～近代にかけての当該地域における小規模な瓦の生産と供給の実態を明らかにする手がかりが得られた。				

---

三重県埋蔵文化財調査報告 415

一般国道42号熊野道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

2023年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 共立印刷株式会社

---





